

---

# InnocentSword

朽葉 周

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

InnocentSword

### 【Nコード】

N6858S

### 【作者名】

朽葉 周

### 【あらすじ】

無限螺旋。それは千の無貌の目論む世界の終わり。

窮極の悪意により産み出されたクラインの壺の箱庭。そして其処で紡がれたのは、最も新しき古き神の産声の物語。

嘗てそんな世界で永劫に巻き込まれた少年は、開放された世界を見届け、彼の世界を去った。

そして少年は新たな世界で目覚める。

その世の正義は、嘗て見た正義の残り香すらなく。その世界は魔が暗躍跋扈する世界。故に少年は決意する。偽者でも其処に立とうと。

魔を絶つ剣は此処に在り。

## 01 無垢なる一刃、異界に降りん。

燃える炎と、襲い来る偉業の化物。

常軌を逸したその光景は、漸く手に入れた平穏がまたまがい物であったのだと確信するには十分すぎる光景だった。

「馬鹿な……」

けれども、ふざけているのはそれだけではなかった。

敵対し、此方に対して攻撃を仕掛けてくる異形。異形達はその魔力で村に火を放ち、逃げ惑う人々を石へと変貌させていく。けれども、けれどもだ。

村人達も仰々しく呪文を唱え、あの異形達に光の矢を撃ち、酷い有様ではあるものの、確かに抵抗を返しながら撤退している。

一体如何ということだと、自分の中の常識が崩れ去るような、そんな感覚に襲われた。

俺の名前は諏訪鋼一。しがな日本的一般家庭に生まれた転生者だ。

いや、転生者であったのは、たぶん過去の話なのだと思う。

俺が生まれたこの日本は、もう既に過去に俺が生まれたあの世界とは大分様相が違う。

俺が過去に生まれた世界。魔と機械が跋扈する、妖幻の世界であり、

敵対的邪神と魔導師達が世界をかけて戦い続けたアザトースの庭。俺は、その世界に邪神の悪戯により産み落とされた、邪神の眷属でありながら人の側に立つ魔導師だった。

そう、あの最後の戦いも覚えている。

大導師と魔導師探偵の最終決戦。邪神達の入り口。その中へと消えていった二人と二機と二冊。

そうして書き換えられていく世界。

外側からの干渉を断ち切ったあの世界で、俺は最後の最後まで生き抜いて、そうして死ねたのだ。

享年は……確か56くらいだったか。

そう、俺は確かに転生者として働きはした。

しかし、もう既に俺の任は解かれたはずだ。

だから、今回俺の記憶が転生後に目覚めてしまったのも、何等かの事故か手違いだと判断した。

なにせコレほどまでに平和な世界だ。俺が手を出す必要性なんて何処にも無いだろうと、そう思っていた。

事の始まりは、俺が六歳になり、嘗ての記憶を取り戻して丁度一年程たった頃だろうか。

その頃になると、俺も嘗ての知識をある程度会得しなおすことに成功して、基本的な魔導師を幼い身体に馴染ませることが出来た、と言うくらいの頃だ。

それで気づいたのだ。父親の身体に残る、魔導師の臭い。

魔に携わる物であれば、隠し様の無い、あの気配だ。

ただ、俺の知るソレとは少し違う。俺の知るのは邪神の力を借り受けるものだが、父親の身体に残るこの気配は、何処か風を感じさせる、暗い臭いとは遠い気配だった。

俺が知るのは字袴子の魔導。けれども、此処は高確率で字袴子の庭ではない。

何故なら邪神の気配が無い。過去の歴史を調べても、霸道財閥が存在せず、アーカムが存在せず、またプロヴィデンスが現存している。此処はあの世界ではないのだと、そう納得していたのに。だと言うのに現れた魔の気配。

まあ、人の世だ。生きていれば魔の一つくらい出てもおかしくは無い。そう納得していたのに。

「鋼一、ちょっと外国いこうか」

父にそう誘われて訪れたのはイギリス、ウェールズの山奥。

古い記憶が危険を叫ぶ。もしかすると、それは俺のオリジナルの知識だったのかもしれない。所謂原作知識と呼ばれるそれ。だが然し、そのときの俺には知識を思い出す術がなかった。

何せ無限螺旋で幾星霜に渡る時を過したのだ。邪神の加護がなければ、俺も確実に壊れていたと思える年月。

まあ、途中で何度も未覚醒のままループが終わった世界も多々あったが。

そうして訪れたウェールズの山奥。

なんとも怪しげなその村。なにせこれほどの山奥に有ると言うのに、発電機もなければ移動手段の車も存在しない。

だと言うのに、何処の家にも街で手に入るような普通の家財道具が並んでいるのだ。そして極めつけは、この村を囲うようにして張り巡らされた結界。この村に入るときに見えた霧と感覚からして、多分外敵から身を隠す為の、認識を阻害する類の結界だろう。

認識阻害？

なんだか聞いた事のある単語に、記憶が少し刺激される。ああもつ、カリンさえ手元にいれば少しは違うのに。

そんなことを考えながら、父と俺はその村に一泊することと成った。何でもその村にいる父の友人に会いに来たとかで、数日ほどこの村に滞在することになった。

本来ならこの山の麓にある街に宿を取る筈だったが、父の友人に勧められ、この村に滞在することになったのだ。

確かに一々麓の町に帰るのは面倒ではあったが、此処で家に帰ってれば、後々の面倒はなかったのではないかと、後になって後悔している。

村に滞在している間に。俺は二人の子供と知り合った。ネギとアーニヤ。名前を聞いたとき、物凄い頭痛に襲われた。記憶の復旧は成らないが、このことから考えて、この二人は何等かのキパーソンであることは間違いないだろう。

アーニヤはまだマシだったが、ネギは山奥に住んでいると言っただけあって、途轍もなく田舎ものだった。正直アーニヤもまだまだだとは思っが。まあ、そういうわけで、二人は俺の（実質数百年分の）知識に目を輝かせて食いついてきた。

ジャパニーズ折り紙とあや取り、その他縄跳びやら色々で遊んだ。此方の方が年上と言うこともあって、二人をリードして遊んでいたのだが。うん、アーニヤめ。年上を全く敬わん。いいけど。

言葉？　ハハツ、数百年アーカム在住だった俺を舐めんな。

アーニヤは麓の町の学校に通っており、学校の休日にこちらに帰ってきていたのだそうだ。

ネギとアーニヤは、この村にいる数少ない子供だそうだ。解りやすい少子化。過疎が進み、子供が減っているのだろう。

然し、こんな不便なところに住んでいれば、過疎も進んで当然だとは思っが。

で、俺とアーニヤとネギは散々遊びまくった。

数百年分の記憶があるとはいえ、今の俺は「今の俺」なのだ。要するに、精神年齢が退行していた。

ネギから魔の才能を感じたり、アーニヤに炎の魔の　クトウグアの好みそつな気配を感じたりしたが、まあソレはおれの関わる部分ではない。

何となくそう割り切って、というか興味を持たず、ただ綺麗な緑の山肌を駆け抜け、釣りをして遊び、食べて遊んで遊びまくった。

途中、なにやらネギが自分の父親は偉大なマホ……とか口走って、アーニヤに叱られていたのがとても印象的だった。うん、フラグ。ネギの従姉妹のネカネさんが何時も後ろで微笑んでいたのが妙に印

象に残った。

そうして数日。アーニヤが一足先に山を下り、涙をポロポロ零すネギを何とか慰め、一緒に湖まで釣りに行ったその帰り。

「……なんだよ、これ」

「おねーちゃん！？ みんな！？」

「あ、ちよ、止まれネギ！！」

悲鳴を上げたネギが此方の静止も聞かずに走り出す。

赤く染まる夜空と立ち上る熱気。何処からともなく響く悲鳴と爆音。

ネギに続いて村へと近付くにつれて、それははつきりと見えた。

千を越える異形の群れが、小さな村を飲み込もうとする光景。

その余りにも洒落にならない光景に、背筋に冷たい物が走る。

逃げなければ。

幾ら無限螺旋を経験した俺とはいえ、今の俺は所詮6つの餓鬼だ。

確かに魔導はつかえる。然し、魔導書の無い現状では、精々基本的なところが限界。嘗ての術式兵装は当然使えず、また術式補助のための兵装も、この世界に着てから魔導を使うことなど考えていなかったため、当然所持どころか製作すらしていない。

出来るのなんて、レジストと術式防御、あとは肉体強化くらいか。

大慌てでその場から逃げ出そうと踵を返そうとして、ふと父親のことを考える。

あの父親、もしかして村にいないか？

ゴクリとつばを飲み込んだ。

今生のとはいえ、父は父。俺は俺でもあり“俺”でもある。今生の俺は、また独立した俺なのだ。

だから、と言っわけではないとも思うが、俺は父が好きだ。母も好きだ。

そうして俺は知っている。父から漂う魔の気配は、とてもではないが強いとは言えず、アレが魔術なり魔に携わる者であるとすれば、寧ろ普通に雑魚の類だろうと。

その父を……見捨てる？

無理だ。無理無理。あの根性無しでヘタレで、でも弱者を見てみぬフリの出来ない心優しい馬鹿親。

俺が無力で有ればよかった。無力であれば、理不尽を理不尽と受け入れられたかもしれない。

……けれども俺は持っている。理不尽に抗う力を。魔を討ち滅ぼす力を。

「ああっ、チクシヨウっ！！！」

悪態をついて、意識を集中する。

大切なのは何時だって意志。闘争本能を奮い立たせ、それを意志を持って制御する。

封印していた魔力の蓋を開き、巡る魔力を整然と体内で循環させる。最も初歩的な身体強化。しかし、それ故に強靱な身体の守り。

小さく一步を踏み出して、そのまま一気に村に向かって走り出した。

村は酷い有様だった。

所々で火の手が上がり、転がる石像からは酷い闇の気配が立ち上っていた。

石化の呪。この世界では如何だか知らないが、古から存在する、かなり凶悪な魔術。

試しにレジストをかけてみる。時間さえあれば解呪も不可能ではないと判断して、即座にその場から移動する。

その最中で、見つけてしまったのだ。

「う　そ」

石像とかした一人の人間。杖らしきものを掲げて、その姿で石像と化した見慣れた顔。

「　又、マダイキノコリガイタカ」

そうして、近付いてくる魔の気配。

「ガキダト？　コノムラニイルガキハ、スプリングフィールドダケ  
デハナイノカ？」

「ハナシガチガウ……ガ、契約八契約ダ」



怒り。怒り。怒り。  
憎悪が身体を作り変える。  
ただの人であることから、魔導師であるための身体に。  
ソレまでに行つた作り変えすら塗り替えて、その器は嘗ての物に勝るとも劣らぬものへと。

魔導師、諏訪鋼一

外見は変わらずとも、その存在する意味は既に大きく異なる。  
ここにいるのはこの世界唯一の魔導師であり、同時に魔を断つ願いを託された一欠片。

「ふむ、この村にこれほどの使い手が居ようとは。それもまだ子供か」

身を包む火災旋風。その外側に現れたのは、外見人の姿を取った化物。

俺にその類の擬装は効かず。

「我が名はユリウス・ハンス・フォン・ハイエク。一手お相手願おう」

そんな悪魔の名乗りと共に、火災旋風の壁が突破される。  
咄嗟に防護障壁を張ったものの、その上からでも通るほどの拳の一撃。身体を背後に飛ばして被害を軽減させるが、それでもその打撃は怒りに支配された俺を冷静にするには十分だった。

フォンを名乗る悪魔。なるほど爵位持ちか。

あの世界では悪魔よりも邪神の脅威が大きかったが、それでも悪魔と言つ存在に関する知識は多少持ち合わせている。

確か悪魔にも爵位制が採用されていて、当然上位者のほうが強い。

だが、俺の知ったことではない。

追撃に何等かの魔導らしきものを放ってくる悪魔。

けれど、もう俺にはソレを回避するという選択肢すら取る必要を感じなかった。

「なっ!?!」

完全覚醒した瞬間から感じていたもの。

時間すら、世界すら超えて、此方にいたろうとする意志の手。

契約と聖約により我等は滅びても、朽ちても、それでも尚共に有り続けることを誓った。

出でよ、現れよ、顕現せよ、我が手に、我が下に、戻れ!!

「カリイイイイイイイイイイイン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

瞬間、天壤が砕けたガラスのように弾け散り、その中から一冊の本が降り落ちる。

革表紙に、金の留め金のなされた革表紙の冊子。

本が現れると同時に、砕け散った天壤は、時間を巻き戻すかのごとく空へと舞い上がり、天壤に開いた虚空を何事もなかったかのごとく埋めなおす。

けれども何事もなかったわけではない。

確かに、此処に、我が手の内に。

「カリン」

《探しました、マスター》

「遠い場所まで、良く来てくれた」

《わが身、我が心、我が魂は常に主様と共に》

我が魔導書、カリン。魔導書ネクロノミコンラテン語版からの再編版。

原本とは異なり、ラテン語版を下にセラエノ断章や、エイボンの書などの記述を理解し編纂した知識が取り込まれている。

つまりコレは、ネクロノミコンの皮を被ったオリジナルの魔導書だ。そしてカリンは、無銘祭祀書 黒の書を取りこんだ際に発現した書の精霊。

俺と無限螺旋を共に歩んだ、異界の魔導書である。

「マキウススタイル魔導戦闘形態」

《肯定。魔導戦闘形態実行》

魔導書のページが風に舞い、同時に身を包み込む。身を包む暖かさが、同時に身の内から更なる熱気呼び覚ます。

「魔刃鍛造」

《バルザイの偃月刀》

右手に鍛造したソレを振りかぶる。

風に乗った偃月刀は、その刀身に刻まれた炎熱術式により刃を白熱させ、驚愕に立ちすくむ爵位持ち悪魔を腹から真っ二つに引き裂いた。

「馬鹿、な……」

手元に戻った偃月刀を再び振りかぶり、地に沈む悪魔に止めを刺す。人外の生命力は舐められない。確りと止めを刺す。これはホラーハンターの常識。

然し、これで状況は確認できた。

力の状態は万全。何故かこの世界には存在しない筈の旧支配者の力も行使できた。

そしてカリンの召喚方法からみて、ヨグソトース……つまり外なる神の力もある程度は行使できると考えていいだろう。

本当に邪神の力を行使しているのか、それとも俺個人の異界法則が邪神の力をエミュレートしているのか。

現状、嘗ての自分に比べて、妙に力が増している現状、どうにも後者っぽい気がしてならないのだが、それは脇にのけておく。

とりあえずやるべきことは一つ。あの調子こいた悪魔どもを殲滅しなければなるまい。

「対霊狙撃砲」

《展開》

そうして瞬時に手に現れた魔導師の杖。

《イア・ハスター》

「狙い撃て!!!」

放たれた凍風の魔光は空へと昇り、四方八方へ向けて無差別に降り注ぐのだった。

「何っ!？」

そうして悪魔を殲滅する最中、何処からともなく強大な魔力が湧き上がった。

咄嗟に身を伏せると同時に空を覆う雷光。

その大半は丘に集う悪魔の群を穿ったが、狙いの逸れた幾つかが、村に向かって降り注いで。

「っ!！」

《呪紋障壁最大出力》

張り巡らされた障壁に直撃する雷光。

一つ一つが重いそれ。幾重にも打ち込まれた雷光に、思わず反撃を返そうとして、不意にめまいに襲われた。

「っ、これは……まさか」

《急激な魔力行使による負荷です。マスター、ご自愛ください》

「しかし ダメか」

意識が薄れるのを感じる。

咄嗟に身体を動かして、地殻の森の中へと飛ぶ。

何とかがたどり着いた森の中、浮き上がり樹の上に身体を横たえて、漸く一息。

石化の呪をディスプレイするにしても、現状の俺では力不足だろう。とりあえず、一休みしなければ。

やることは多い。けれども、焦ってもいいことは少ない。

逸る己にそう言い聞かせて、一時の眠りに意識を沈めたのだった。

## 02 戦士は道を選びて……。

結局の所、あの村の惨劇は、魔法使い達によって完全に隠蔽されてしまった。

「人の頭勝手に弄りやがって……」

ウェールズの病院の一室。目覚めた途端、記憶の欠如に気付いた俺は、即座にカリンを装身。カリンの呪力により即座に消された記憶を補填し、更にいざという時のためにカリンに記述しておいた原作知識を再読した。

2ch用語により暗号化された原作知識群は、即座に俺の頭に馴染む。

そうして気づいた。この世界が、ネギまであると。

……デモンベインの次がネギま。意味が解らない組み合わせである。まあ、二ト口つながりで沙耶の唄とか、二ト口の親しい型月世界に飛ばされたりせずに良かった、と考えるべきか。

さて、話がそれだが、俺の起すべきアクションは幾つあるのか。

先ず母さんに父さんのことを話さねばなるまい。母さんからは闇の気配はしなかったものの、父さんの配偶者である以上、少しなりとも魔法についての知識は所有していると見るべきであろう。

あの父さんのことだし、もしかすると言っていない可能性もあるが。

次。ネギま世界だとわかった以上、この世界には「正義の魔法使い」なる存在が跋扈していることになる。

あんな邪悪な連中に地上が犯されているのかと考えると、ちょっとドロロではなく憂鬱になる。

と、なれば。

「門を砕くか」

MMの暗躍を許す旧世界。

魔法世界が滅ぶ？ 旧世界への移住計画？ 魔法世界の人間を救う？

知ったことではない。魔法世界は魔法世界、旧世界は旧世界として独立すべきだ。

他者に頼り、他者を食い物にする。それは間違いなく邪悪。討つべき対象だ。

未来も大切だろう。けれども、今を大切にしないやつに未来は無い。

MM、許すまじ

石化した村人は父のついでに助ける。が、その場合考えられるのはMMの再犯だ。

それを回避する為には何が必要か。

MMの干渉の除去。つまりは門の破壊。

なんとも簡単なお仕事。

では、ソレをする前に先ず一仕事。

「おお、おきたかねコーイチくん」

「あの……貴方はどちら様ですか？ 此処は？」

病室の扉から現れた、いかにも魔法使い然とした白髭の老人。  
俺の知識が正しければ、現メルディアナ魔法学園校長。ネギ・スプ  
リングフィールドの祖父にして英雄の父。

とりあえず魔力やらその他諸々は隠蔽してある。精神にも擬装を施  
しているのです、そう容易く見抜かれることは無いと思うが。

最初のお仕事は、惚けること。うむ、ハズい。

と言うわけで何とか日本へと帰還しました。

付き添いに付いてきた魔法使いらしき人物が、母に事情説明を行っ  
ているらしい。

正直ありがたい。事情を知る筈の無い俺が語るよりも、関係者が語  
ってくれたほうが楽だ。

ただし、あまりハツチャケたことをしたら許さんが。

うん、最悪母さんの記憶を弄られるかもしれないと警戒していたの  
だが、どうやら其処まで悪辣な魔法使いではなかったようだ。MM  
の人間は大抵悪辣というのが俺の頭に入っている知識だし。

さて、そういうわけで母さんに呼び出された。父さんに関する事情  
説明をするらしい。

ついでに何故か傍に居る魔法使い。何時までこの家に居座る心算な  
のか。さっさと帰れ。

「こつちゃん。大切なお話があります」

そう前置きして話されたのは、『魔法』の存在と、父親がソレに携わっていたこと。

　　「っておいおい、ソレ俺に話すのかよ。」

で、何故に俺にそんな事を話すのかと言つと、どうやらこの俺を送ってきた説明の魔法柄い。こいつが俺のことを育てたいとか言い出したのだそつだ。

「どつだ。キミに学ぶ気が有るのであれば、俺が師と成るが」

ゴメン、物凄く怪しいです。

「その前にお聞きしていいですか？」

「なんだ？」

「何故僕を弟子にしようとする？」

問うと、白人系の男性である魔法使いは、少し悩んだような様子で口を開いた。

「ワタシは、キミの父と友人だった。本来ならあの事件の翌日、一緒に集まって酒を飲むはずだった」

そう口惜しそつに言う男性。なんでも、（何処とは言わない）本国の下請けとして働いており、遅れて合流する手はずになっていたのだとか。

「ギンジの息子だ。本当ならヤツが手ずから育てたかつたのだろうが」

なるほど。父さんの代役をやりたいと。

精神のほうにも擬装は感じられず、本心を語っている様子だ。別にこの人についていっても問題は無さそうだ。

「一ついいですか？」

「なんだい？」

「その場合、ぼくは何処に住むんですか？」

「うむ。イギリスのメルディアナに行こうかと考えている」

メルディアナには魔法書の蔵書も多く、勉強には適しているところだ。云々。

なるほどコレはネギ寄りルートなわけだ。

此処で領けば、ネギに近く、メルディアナで学び魔法を習得する王道ルートに行く。

大して此処で首を振れば、一般人として過すノーマルルートに行くのだろう。

ルートで物事を語る俺乙。

「止めときます。ぼくは母さんと一緒にいます」

ちよつとだけ悩んで、結局そう答えた。

何せ父がいなくなつた今、俺までこの家から居なくなつてしまえば、後に残るのは母一人。それは拙いだろう。

第一、俺が魔法を習得するメリットはあまり無い。

ファンタジー系世界の中で、最も融通が利くニトロ類クトウルフ系魔法をかなり高い階位で修めた俺だ。今現在は十全に使えるというわけではないが、コレが完全に使いこなせれば、あの石化とて解くことは可能だろう。

寧ろ魔法なんていう脇道に逸れて解呪が遅れるほうが問題だ。

「そう、か。ふ、さすがはヤツの息子。流されないな」  
「ですか」

「だが然し、キミには何時か麻帆良学園に行つて欲しいんだけどね」  
「なんだろうか。俺を本編に巻き込む心算なのか？」

まあ、時が来ればそれも一つの選択肢かとは思うが、残念ながら俺にはやるべきことが いや。

「んじゃ、麻帆良に入学します」

「いいのかい？ そんなにあっさり」

「母さんがなんていうかわかりませんが」

問うた瞬間OKが帰ってきた。さすがは母さん。

「うん。ならこれ以上俺に出来ることは無いだろう。そろそろ失礼させていただく」

「はい。お世話になりました」

母さんが魔法使い氏を見送りに行くのを尻目に、色々考えるべきことが出来た。

この世界で俺が何をすべきか。  
ソレをなす為には如何いう手段を用いるべきか。  
そして、保険の製造。

考えるにつれて、大体の構想は即座に纏まってきた。  
でも、そのためには資金を作らなければならない。

資金　くくく、そうか資金か。  
ソレを得る手段は既に手の内に。思い浮かぶのは緑の髪のが師、  
変態科学者。

考えが纏まった時点で、とりあえずアレを作るために近所のホーム  
センターに行くことにした。

勝利の鍵はトイ・リアニメーター！。

さて、作ってみようか。

俺の、魔を断つ剣を。

### 03 社会の沙汰は金次第

先ずすべきことは何かと言うと、資産作りが最優先だろう。と言うわけで先ず作ったのが、トイ・リアニメーター。

これはデモンベイン世界で生み出された浮遊半自動作業ロボット。元々はDr・ウエストの発明であり、ループの最中で霸道財閥所有の品とされてしまった曰く付きの一品だ。

トイ・リアニメーターは原作中では霸道財閥のデモンベイン修復装置として登場していたが、どうにもアレだけ他に比べて異端臭かった。

何せ、デモンベインの建造には数多の魔導師と数多の技術者が心血を注いで建造したのだ。だというのに、その維持が機械任せ？

機械の系統的にも、エイダ霸道婦人の蒸気式とも違い、霸道の魔導師機械式でもない。

あれは、あれだけは純電気式。そう、Dr・ウエストの技術系等に並ぶ代物なのだ。

確かにデモンベインは人が携わらなくても動くオートメーション化が進められていた。

然しそれはあくまでデモンベイン本体の稼動に関すること。

トイ・リアニメーターに関しては周囲の技術レベルを明らかに数段ぶっ飛ばしている。

というか、魔導機械を整備できるロボットと言う時点で、もう霸道ではありえないのはお分かりだろう。

まあ、実際博士がトイ・リアニメーター作る所にも何度か立ち会ってるし。

性能はどうなっているかと言うと、凄まじい。流石に重量物質を持ち上げたりと言う出力に限界はあるが、それでも人の手の届き辛い高所での活動や、人を圧倒的に上回る作業効率。何より少人数で秘密裏に作業を進めたいとき、こいつほど頼りになるマシンは存在しない。

と言うわけで、とりあえず一機トイ・リアニメーターを手で製作。そしたら次はトイ・リアニメーターにプログラミングし、トイ・リアニメーターがトイ・リアニメーターを作り出す。完成したヤツには次のトイ・リアニメーター製造作業に入らせて　とやっているうちに、鼠算式にトイ・リアニメーターが増えた。

と言うわけで、コイツラを使って商売をすることにした。

但し、俺の名前で商売をするわけにはいけないので、母さんに色々権利を肩代わりしてもらうことに。

先ず最初に製造したのが、超軽量自転車。

俺の錬金術で生み出した特殊素材と、トイ・リアニメーターのトンでも加工技術が合わさり生み出されたこの自転車は、なんと8キログラムという超軽量を実現させた。

コレが主婦に馬鹿受けした。軽くて丈夫な自転車だ。主婦の味方として大活躍した。

当然他企業がコレの製造法を探ろうとした。いや、連中はちゃんとたどり着いたのだろう。

しかし此処で企業は啞然とした筈だ。何せ、パイプ構造の一体形成素材は外見的には普通のアルミの類と変わらない。然し魔術的な反応が出るかといわれれば否と答える。

アレは錬金術の産物。いわばアルミの皮を被った何かなのだ。

そういうわけでうちの自転車は馬鹿受けした。

と言うわけで次に移る。

次は母さんの依頼で車を作ろうという事に成った。

母さんが希望するのは、可愛いミニ。近所へのお買い物に使えるようなミニだ。

此処で俺は相当悩んだ。

何せ俺のデザインは、基本的に無骨なものを好む。機能的な丸み、角ばってゴツゴツした無骨なデザイン。そういうのが好みなのだ。

いままでの自転車なんて、素材レベルでこり押し下だけの代物だ。デザインなんていうのはそのあたりにある十把一絡げと大差ない。

しかし車。デザインに自由度がありすぎて困る。

と言うわけで、今回会社を少し大きくしてみた。

今までは有限会社の類で、株とか発行していなかったのだが、今回はデザイン系の人間と、事務系の人員を何人か雇うことにした。

因みにデザイン系の人の中には、大手メーカーからの転職者もいた。なんでも向うでは中々自由なデザインをさせてもらえなかったのだとか。

まあ、自由にデザインしてくれればいいさね。

と言っわけで生み出された諏訪社初の軽自動車、タンポポ。軽くて硬くて頑丈でよく走る。まさに最強の車となった。

車の機能にしても、エコだとか電気だとか余計なシステムは搭載せず、純然たる普通燃料車とした。

その代わり燃費効率は普通の車の数倍はある。

そしてこれまた他企業に内容を調べられた。

が、結局連中は真似することもできないだろう。何せこれまた一体形成だ。

エンジンの一体形成。真に意味不明な製造法である。

で、これもある程度売れたので、田舎にでかい土地を買って、其処に大きな工場を建てた。

周辺に住人の居ないこの田舎だ。何を作ろうが誰にも咎められない。いや、やりすぎた場合国に文句を言われるかもだが。

と言っわけで、地下にでかく、地上にこじんまりと工場を建てた。

この秘密基地の建設過程で、更なるトイ・リアニメーターが増産されたのは言っまでも無い。

さて、そんな感じに会社を作っていく最中、俺は俺として別口で、戦いの準備を始めなければいけない。

本編に介入するにせよしないにしろ、俺は既に原作ブレイクを目的

としている。

そのための種も既に各国にばら撒いた。

後は実行する為の手段を用意する必要があるのだが。

「カリン、欠落した記述は無いんだな？」

《肯定。状況は前世から完全な引継ぎを確認》

という事らしい。つまり、魔術の行使に関しては、少なくとも魔導師書に関しては完全だ。

後は俺が身体を鍛えて、実際に魔術を運用し、その反動に耐えられるようになればいい。

然し、ソレとは別に、矢張り魔術を補助するための術式兵装は新たに編みたい。

前回　というかループ時、俺は大抵ネクロノミコンに記載されていた対霊狙撃砲を使用していたのだが、どうにもアレは取り回しが悪かった。

対霊狙撃砲は如何考えても中距離～遠距離の、名前の通り狙撃を目的とした代物だろう。

大して俺の特異戦闘範囲は近距離～遠距離の万能型。確かに遠距離戦では使えるが、近距離～中距離では取り回し辛い。

嘗ての無限螺旋では、魔導師としての錬度も足りず、魔導師として一定以上の階位に達したときには既に武器の性能に左右されるような無様を晒すレベルは卒業していて、結局最後まで対霊狙撃砲で戦い続けたのだ。

が、現状は違う。身体は幼く、術の反動を全開で受け続けると、幾ら俺とは言えど戦闘継続時間はどうしても短くなってしまっただろう。と言うわけで、反動を抑えるため、新しく術式兵装を用意すること

になった。

決して、格好いい武器を使いたいからとか、それだけの理由ではない。うん。

「モデルになる銃ですか？」

「そう。ハンドガンで、格好イイのがいい」

デザインを担当している社員の青年一人に尋ねてみた。

何せこの拳銃のデザインと言うのが途轍もない数存在している。

俺が見ただけでも、ソーコムピストルだとかいろんな種類が存在した。

因みに、スプリングフィールドって銃があつたのは驚いたしワロタ。

「それじゃ、オート9とか如何ですか？」

「えっと……ロボ警官ロボが装備してたアレ？」

「自分で言ってるなんなんですけど、良くわかりますね……」

まあ、10歳未満のガキがオート9で即座に反応すればそりゃ違和感か。

「でも、アレって架空銃つしょ？」

「あれはベレッタですよ。設定上はM92なんですけど、実際の設計にはM93Rを使用されてるとかで。俺の友人にプロップガンで作ってみたって自慢してきたやつが居たんですけど、そいつもM93Rを下敷きにやってみましたし」

「ふーん」

なるほど。ロボ警察の銃ねえ。

でもベレッタってことはつまり9パラ。イブニングガズの霊薬の封入量が減る気がするの俺だけだろうか。

だってほら、大十字とか50AE弾とか普通にぶっぱなしてたじゃん。

でかい魔物相手にするのなら、段数が　いや、相手は人間の魔法使いの可能性もあるのか。

とりあえずオート9は候補の一つにストック。

「他には何か候補ない？」

「小型でスタイリッシュならワルサー、無骨な兵器ならばH&Kですかね」

多分社長ならH&KのUSPマッチとか絶対好きですよとか言われて、実際にネットで見て惚れた。

然しコイツを下敷きにするには、限定生産と言う壁が存在する。手に入れるのは難しいだろう。

いや、いつそトイ・リアニメーターに削りださせるか？

案の一つだな。

「威力でいくなら、S&WのM500とかですかね。俺はあんまり好きじゃないんですけど」

「なんで？」

「だってほら、弾丸を矢鱈とでかくしすぎです。でかけりやいって物じゃないと思うんですけどね」

うん、大十字に是非その言葉を言ってやりたい。

シモも弾丸もでかけりやいってモンじゃなーんだぞー！！

二ト口砲の大十字。侮り難し。

「M1911も良いんですけど、流石に古過ぎるし……」

「流石に100年前の銃はねえ」

で、結局如何したかと言うと、とりあえず色々と手に入れて、実際に弄ってみることにした。

因みに密輸である。

「ふーむ。Mark23が予想以上に手に馴染む」

H&K社のMark23。つまりはソーコムピストルだ。もつと簡単に言うと、ダンボール好きな蛇の愛銃だ。

「まあ、格好いい銃ですね。ちょっと食傷気味な気もしますが、それだけ名銃ってことですし」

連射性能とかはベレッタに劣るが、45口径で耐久性も高く、汎用性も高い。

凄く……俺好みです。

と言うわけで、早速術式兵装化を開始する。

一応だが、大十字九郎の持っていたあの二丁の「暴君の魔銃」のデータは記録させてもらっている。

共に優れた魔術理論で余れた武装で、アレがあれば素人でもある程

度戦えてしまおうというような、とんでもない一品だ。

聊か便利すぎるアイテムではあるが、こちらは幼少の身体。あまり拘っていられるような状況でもない。

と言うわけで、Mk・23をガリガリ改造していくことにした。

基本的なところは同じままで、要するに魔導師の杖としての性能を上書きし、ソレを更に術式として再構成しなおすわけだ。

要するに俺が必要とするのはこのMk・23の影。実体の影を取り込み、それに術式を描き完成した一つの術とする。

「と、言うわけで俺は暫く作業に籠ります。素材は用意したし、リアニメーターにも指示は入れといたから、後頼むね」

「ちよ、社長！」

悲鳴を上げる新人さんを尻目に、地下の魔導実験室へと足を運ぶ。何よりも、新しい玩具にわくわくしていた。

## 04 鋼の刃は未だ在ら不。

用意された2丁のMk・23。

取り敢えず一丁術式兵装を作ってしまったえば、後は銃を依代とすればいいだけなのだが。

嘗て大十字九郎が使用した暴君の魔銃。あれは別に、クトウグアとイタクアを制御する為だけに存在したわけではない。

アレはそもそも対霊狙撃砲と同じで、魔法使いの杖なのだ。

であるならば、あの銃2丁を差別したものは一体なんなのか。

俺が見るところ、アレは要するに、対霊狙撃砲より小さい分、機能を限定したが故に2丁になったのではないかと考える。

要するに、制御の方向性だろう。

威力を依り一点に向けて集中させるか、威力の収束先に方向を定めるか。

何を言ってるのか自分でも判らなくなってきた。

とりあえず何を言いたいのかと言うと、俺の術式兵装は同じMk・23だが、どれでもイタクアとクトウグアどころか、ハスターの力だつて借りられる程度には上物に仕上げた、という事。

当然、デウスマキナがあれば、それ用の術式兵装として召喚も出来る。

「……………デウスマキナ……………なあ」

そう、デウスマキナ。ロボット分が足りない。

嘗ての世界、俺は何度かデモンベインに搭乗した事がある。と言うのも、アレは大十字が別件で動いている最中に、大十字の下までデモンベインを運ぶ為だったり、とりあえず代役の囃として乗っていたりと。

そのほかにも、西博士の下に付いたとき、デモンペインだとかアイオンのパチモンのアエオンだとかに搭乗した事もある。

何が言いたいかと言うと、要するにロボットに乗りたいたいのだ。

現在ド田舎のど真ん中にある諏訪グループ本社。その地下に広がる大規模秘密基地。

かなりの深さに儲けられたその基地の中、錬金術で作った素材で、現在10数メートル級のロボットを建造中だったりする。

因みに、俺は鬼神召喚の術式を使うことは出来る。

ただし、カリンの元となつたのはネクロノミコンラテン語版からの再訳。色々混ぜてしまつてはいるが、召喚されるデウスマキナはつまり……アイオンっぽい何か。

何故それをアイオンっぽい何かと言うかというと、何かアイオンの形が妙にネクストっぽいのだ。

別にコジマ粒子とかを発しているわけではないし、背中に武装がついているわけでもない。

だというのに、何故だろうか。俺の召喚するアイオンは、妙にアイリヤ臭いのだ。

考えても見てほしい。60メートル級のNextアイリヤ。物凄く……格好いいです。

やっぱりアレだろうか。無銘祭祀書を取りこんだ影響と、ラテン語版再編のときにセラエノ断章とかエイボンの書とか色々参考にした所為だろうか。

それとも単純に俺がアーリヤ好きなだけだろうか。

まあ、とりあえず色が赤かったのでクラーズナヤって呼んでた。ロシア語で赤って意味。そのまんま。

ただ、俺としてはあまりあれをそのまま使う気には成らない。何故なら、クラーズナヤはあくまでクラーズナヤ。アレは一つの完成形なのだ。

俺の望は一つ。

無骨で、頑丈で、その場に実在する物質としてのデウスマキナ。

いや、デウスマキナに拘る心算は無い。

別に脳量子波で動こうが、AMS接続で動こうが、魔導コックピットで動こうがなんでもいいのだ。

現在建造中のデウスマキナは、デウスマキナ・クラーズナヤを参考に、機械的に人の手で作り上げたデウスマキナ。つまりはデモンベインと同じ構想で、ダウンサイズしたAARIEYAHを作っているのだ。

開発コードはシュープリス。

10数メートル級。まあ、オリジナルのサイズも確かそれくらいだったはずだし。

因みに鬼神召喚がよくよく考えればスケールダウンしての召喚も可能だと気づいたのは、シュープリスが殆ど完成したその数日後のことだった。



## 05 無限の心臓。

と、言うわけで、シュープリスが完成しました。

駆動方式は電力と魔力のハーフ。制御方法は魔力制御。勿論機械制御も可能ではあるが、機材がかさばるので基本的に魔力制御。

主機は無限の心臓。うん、そうなんだ。無限の心臓なんだ。

マナウス神像が無いし、獅子の心臓とか作るの無理臭いかな〜とか思っていたのだが、幸いにして俺の手元にはカリンが存在する。

カリンは基本ネクロノミコンではあるが、編纂するときには様々な魔導書を参考に行っている。

例えば、エイボンの書とか。

無限の心臓の記述から作り上げた獅子の心臓。

獅子の心臓から沸き上がる無限の熱量を、魔術的変換により電力化。これによりシュープリスは無限のエネルギーを手に入れることになった。

ただ、なんとというかまあ、やはり魔導書の存在は必須。

獅子の心臓の起動と制御には、一定以上の魔術的情報量。つまりは字袴子が必要となる。

人間の持つ魔術的情報量はどうしても一定以上に足りず、これを単身で動かしているのは、それこそ魔人の類。

そしてシュープリスを動かせるほどの魔力を持つ魔導書など、この世界に存在するのはカリン一冊。

魔法書ではダメなのだ。あくまで魔導書でなければ。つまり、実質この世界でシュープリスを動かせるのは俺一人という事に成る。

うん、準備はこんなところか。

戦の準備は十全。

では次に、組織の方に力を入れていこうと思う。

組織、と言うと妙な響きだが、要するに俺はこの世界で独自の魔術基盤を持つことになる。

この魔術基盤を俺一人で独占するのは良くない。と言うわけで、才能のありそうな人間を拾っては教育したりしていたのだが、いつの間にか規模が大きくなっていった。

と言うか、俺が拾う以上に俺の元に勝手に集まってくる人間が多かった。

それも、俺が教える前から、どうも魔導に知識のある臭い人間が多かった。

俺以外に魔導を扱う人間がいるという事なのだろうか。

試しに知識の元を尋ねてみたのだが、彼等は軟らかく笑って黙秘した。

悪い気配もしなかったので、問題は無いと判断。そのまま放置しておくことにした。

内側の毒？ 悪意の2、3飲み干せずして何が経営者かつ！！ではなく。

俺の記憶が正しければ、ネギま本編が始まるまで、あと数年しかない。

それまでにある程度、組織としての形を整える必要がある。

現在我々の組織に加入しているのは、先進国各国政府、地域土着の魔法組織など。

関西呪術協会とも提携を結んでいる。

「社長、AMF搭載型スタンロッド、漸く完成しました!!」

「あー、お疲れ様。漸くだねえ」

アンチ・マギリング・フィールド搭載型スタンロッド。  
要するに魔法を弾く機能を備えた電撃ロッドだ。

「因みに持続時間は？」

「連続稼働で30分が限界です……」

「そんなところか。まあ、魔法使い相手に最低限の武装で立ち向かう場合、30分以上対峙するのは自殺行為だし。いつか」

我等が組織、名前をMS（銀色の月光団）だ。

因みに命名はかなり適当。

MSの構成員は各組織から技術提供の代わりに派遣された構成員だ。

MSの主立った組織目的。それは魔術結社にありながら、表と裏の分離にある。

昨今、『魔法は隠匿されるべき物』とされながらも、西洋魔術師達は平然と一般人の前で魔法を行使する。そうして魔法がばれた場合、連中は目撃者の記憶を好き勝手に弄繰り回す。

そもそも連中は、魔法を隠匿すべき物として扱っていない節がある。ソレを建前にして、一般人を魔法の裏社会へと引きずりこむ口実にすらしているように感じられる。

そんな現状だ。連中は自分達こそ正義と妄信し、その勢力は拡大の一途を辿っている。

故に。今こそ我等は初心に帰るべきではないのか？

魔法の隠匿。その当然を、当然としてなすべきではないのか？

ではそれを成す為に先ず必要なことは何か。

各国の政治にもぐりこみ、内側で好き勝手を行う魔法使い達の排出各地に伝わる土着の魔法を異端と蔑み、自分達こそ世界の正義とする傲慢な魔法使い達から自らの土地を奪い返す。

……とまあ、なんとも過激なお題目を前に、M Sは徐々に規模を拡大させた。

いや、規模を拡大させたと言うよりは、分断されていた土着の組織達をまとめ、一つの巨大な組織に下と言うほうが正しいか。

表政府に対してはAMF装置とマジリングセンサーの販売により政治社会からの魔法使いの追い出しを。

裏世界では、我が物顔で土地を侵略する魔法使い達に対する攻撃を。

結果から言つと、俺が動く必要は本当にあつたのだろうか、と言つ  
ほどあつという間に西洋魔法使い達の勢力を削ることは出来た。

と言つのも、先ず最初に世界各地に点在するゲートポートを襲撃し  
たというのが大きいだろう。

月に一度しか開かないゲートポートだ。逆に言えば、その月一以外  
は警戒が極端に緩んでいるのだ。

何時か起こるであろう完全なる世界によるゲートポート襲撃事件。  
けれども、我々にはそれを待つだけの余裕が無い。西洋魔法使い達  
と表立つて敵対する以上、敵の増援が来る事がわかりきっているの  
だ。その補給ルートを潰すのは当然の事だと言える。

と言つわけで、世界各国の主要なゲートポートの破壊を慣行。

世界各国で同時に破壊されたゲートポート。とはいえ、活動休眠期  
間で、人的被害は殆ど無し。破壊も旧世界側からのみで、魔法世界  
側のゲートはまだ残っている。

破壊できたのは大国の支配する地域に存在する物。アメリカやロシ  
ア、中国あたりのゲートは破壊できたものの、ヨーロッパのほうの  
ゲートは破壊し損ねてしまった。

しかし、それだけでも今は絶大なチャンスなのだ。

「此処か」

召喚したシャンタク鳥の記述により空に留まる俺の眼下。

世界各地で起こった同時ゲートテロ事件。その処理のため、現在稼動しうるゲートのすぐ傍にあるメルディアナは、こんな時間だと言うのにまだまだ人の活気が満ちている。

ひと気が多いのはデメリットだが、人の出入りが多いのはメリットだ。

魔術の気配を隠蔽し、そのままゆっくりとメルディアナの敷地のすぐ傍へ。

集中すると共に感じる魔力の結界。侵入者探知の初歩的且つそれゆえに頑丈な結界。  
然し初歩的という事は、付け入る隙も十分にあるという事だ。

この結界は、単純に内側と外側を出入りする存在が、出入りに関して許可を持っているかの有無を確認するだけ。  
確かにMMの庇護下にある、それも魔法使いが大量に要るこの拠点に特攻をかけようと言う馬鹿は居まいが、だからといってこの現状でこの結界しか張っていないと言うのは油断に過ぎる。

ヨグソトースは門にして鍵の存在。

結界の外側から内側に門を開くことくらいは、お茶の子芥々というやつだ。

そうして敷地の内側に入ってしまったえば後は楽勝だ。

魔法使いと言うやつは、それに固執する余り、科学に対してどうにも情弱と言うか警戒が薄いというか。

予め身に纏っていたスニーキングスーツの上から、更に黒色のロー

ブを身にまとう。

こうして夜景に紛れてしまえば、魔法使い達に感知されることは先ず無い。

魔法を使わず科学を使う。まさに科学の勝利。

そうしてこそこそとメルディアナの中を徘徊し、漸く見つけた地下への入り口。

漸くだ。漸くこのときが訪れた。

こっそりと進入した地下階段。

折りきつた先の扉を開いた先。奥まで光が行き渡らないほどの広大な空間に収められているのはその広大な空間を所狭しと埋め尽くすほどの石像。

必要なのはこの中の一体。けれども、術式はこの全てにかける。本当は父さんだけ助けられれば俺はそれでいいのだけれども、多分父さんのことだ。自分だけ助かったと知ればそれはそれで悲しむだろう。

ならば、俺は父さんに義理を返すため、また共に遊んだネギとアーニヤに対する義理として。

瞬時に身を覆う魔導書。マジウススタイルと化した瞬間、全身を巡る魔力が活性化し、その活性化した魔力を更に意図的に奮起させる。

「 術種選択、解析術式」

《対象捕捉、石化術式》

「 術種選択、解呪術式」

《ナアカル表による呪詛解読。術式置換。人を呪う悪しき願いよ、

我が前にその戒めを解き放たれん』

「　　ディスプレイ」

放たれるのは薄緑色の輝き。

魔力が大気に触れたその反応。輝く緑は、徐々に暗い地下室を覆いつくしていくが。

「ち、やはり出力が足りんか」

『銀鍵守護機関の使用を提案』

「あれ単独でか？」

『肯定。銀鍵守護機関の使用は、解呪後の退却時にも有効』

「ふむ……」

まあ、銀鍵守護機関はシユープリスのほかに、もう一つほどテスト機が作られている。

其方をこの場に転送させれば……いけるな。

「では、その案で」

『準備を開始します』

そういうわけで、大慌てで地下室の石像を少し詰めて、小さいながらスペースを用意する。

このスペースに上手く召喚出来ればいいのだが。

「　　虚数展開カタパルト作動」

S i d e o t h e r

その瞬間、人の踏み入る事の無い、完全な静寂に満たされていた地

底の空間に、突如として火が入る。

何処からともなく送信された字袴子信号。

基地に設置された自動演算装置はその字袴子信号を読み取ると、即座に基地内の動力を全力で稼働させる。

P i

そうして起動する虚数展開カタパルト。

それに連なる貨車の一つが、自動的に発信位地へと移動しく。その上に載せられているのは、銀の円盤。巨大なその円盤は、実に直径1メートルはあり、分厚さも相当なものがある。

— ∽ “ ( ) ’ & % \$ # ” !

貨車が到着したのは、巨大な瞳の真正面。

機械とは思えぬ、ギョロギョロと動くその瞳。それが貨車の上のそれを捉えた瞬間、周囲を黄金の光が包み込み。そうしてそれは、無限に続く奈落の虚空へと落下していったのだ。

S i d e O t h e r E n d

ズンという威圧感と共に空間に描き出される魔法陣。

その中から墜ちるように召喚されたそれに、対衝撃緩和術式を投げた軟着陸させる。

「よし、それじゃ行くぞ」

《再演》

そうして、再び先ほどと同じ術式を構成していく。  
但し今回は一工程だけ違う工程が含まれる。

カシャンと音を立てて、円盤の内側からせり出してくる。

それから石柱は高速で回転を開始すると共に。その中心に現れた空間の歪から無限の熱量／無限の魔力を引き出す。

其処から生み出される莫大な魔力を元に、再び、今一度解呪の法を。

あふれ出す緑色の光が、地下の広い空間を塗りつぶし、地下室一杯に、それどころか更に力の与え所を求めて四方八方へと荒れ狂う。

《ナアカル表による呪詛解読。術式置換。人を呪う悪しき願いよ、我が前にその戒めを解き放たれん》

「　　ディスプレイッ！！」

そうして、光が爆ぜた。

## 06 帰還と涙と酒乱ども。

Side Other

「誰じゃっ!!」

誰も居ない筈の地下室。嚴重な秘匿がされ、封印されていた筈のその部屋から洩れ出た魔力反応。

隠蔽されたその気配に、しかしこのメルディアナで只一人だけ気づいた人間が居た。

他の誰でもない、このメルディアナ魔法学園の最高責任者。メルディアナ学園長だった。

即座に杖を構え地下室に突入した彼は、即座に威嚇の声をあげそうして、その光景に思わず唾を嚥下した。

室内を満たすのは、何処までも優しさを感じさせるライトグリーン  
の輝き。

けれどもその規模は決して人に出しうる物ではなく、それは嘗て英雄と呼ばれた彼の息子であるナギ・スプリングフィールドのそれすら上回るほどのモノだと、かの翁は即座に感じ取っていた。

その中心にいるのは、如何やって作ったのか小さなスペースに銀色の台座を載せ、その傍で魔力を感じさせる分厚い魔法書らしきものを構える魔法使いらしき人間の姿。

そうして一瞬の硬直を経て、翁はすぐに体勢を立て直し、そして再び驚愕に目をむくことになる。

「なっ 石像が!？」

あふれ出すライトグリーンの光が石像を包み込むと同時。ピシリと音を立てて石像の表面にひび割れが入る。

「止めい！！ それは只の石像ではないのじゃぞ！！」

「手を止めるのは其方だよ、御老体。なに、悪いようにはせんよ」

翁の声に、魔法書を構えた魔法使いはそんな言葉を返して。そうして翁は再び目を見張ることになる。

ひび割れ、零れ落ちた石像の表面。その下からのぞく、肌色の柔らかなそれ。

ざらついた石の肌ではなく、血の通いを感じさせる人肌が、その崩れ落ちた岩の下からのぞいていた。

「馬鹿な、爵位持ちの悪魔の石化を、我々が為し得なかったディスプレイを」

「御老体、世は広い。人の限界は科学が補う。それは魔法も然り。魔法が正しく使われていれば、今頃は科学と競合し、より進んだ世界になっていたかも知れんがな」

その黒ローブは、何処か言い難い感情を、まるで噛み締めるかのようにつにそう呟いた。

「 貴殿は、一体……」

「御老体、頼みがある。村人の開放をMMに伝えるな」

「な、何故じゃ！？ 貴君の行いは本国で正式に表彰され いや、まさか、そういう事なのか ！？」

そうして翁は、彼の言葉から大まかな経緯を推察してしまう。

それは考えうる可能性。可能性の一つとして考え、しかし戯言と斬り捨てて　違つてほしいと願つていた考え。

然し、この黒ローブの言葉で、老人は一つの確信を得てしまった。

「話が早い。後は頼んでもいいかな？」

「　　請け負おう。然し、貴殿は一体……」

「伝えるべきは伝えた。ではな御老体、精々孫が政治の駒にされぬよう気をつけることだ」

黒ローブはそういうと、タンツ　と小さく、けれどもよく響くス Tepp を鳴り響かせた。

そうして翁は、再び目を見開くことと成る。

少年と銀色の舞台装置のようなそれを囲うように、黄金の五芒星。再び現れる桁違いの魔力に思わず目を回していると、まるで突然地面に穴でも開いたかのように、黒ローブと銀色の舞台装置が魔法陣の中心へと墜ちて行った。

慌てて魔法陣へと近寄る翁であったが、然したどり着いたその場所には何の変哲も無い地面しかなく。

「　　取り敢えずは、彼等の手当てじゃな」

四方八方で目覚めた村人達。彼等は数年前の村襲撃事件から、突如として数年後の、メルディアナの秘密地下室に転移したようなものだ。

中にはいまだ戦闘中であつたもの、怪我をした所を石化していたものと、それらが一同にパニックになりかけていた。

「やれやれ、しんどい仕事になりそうじゃわい」

小さく呟いた老人は、しかし何処か嬉しそうに面々を見つめ、声を出す為に大きく息を吸い込んだ。  
翁の仕事は多い。

彼等に事情を説明し、信用の置けるMMの息の掛かっていない人間に彼等を此処から脱出させ。  
翁の仕事は多い。

けれどもそれは、彼等懐かしき村人達が帰ってきたからこそそのものだ。

だからだろうか。翁の口元には、小さな笑みが浮かんでいた。

Side Other End

さて、そういう訳で村人達を開放しました。

何か物凄く厨二病臭い喋り方をしてしまった気がする。うーん、ダメだな。顔を隠して暗躍とかやるとどうしてもテンション上がって厨二病が再発する。シニタクナルネ。

因みに、多分アーチャーさんじゃないかな？

父さん？ あの場で父さんだけ連れ帰ったりした場合、確実に疑われるので止めておきました。

まあ、うちは関東と関西の間 どちらかと言えば関西よりなので、多分普通に帰ってこれるでしょう。

何せ電力も60Hzですし。

とか考えていたら、その数日後に父さんが家に帰ってきた。もう、あのぼわぼわしてる母さんがポロポロ涙を流しているところを見てしまってもう、此方まで泣けてきてしまった。

うん、ゴメン母さん。もうちょっと頑張って、一刻も早く父さんを解放すべきでした。

シュープリスの製造に夢中になって、もう少し早くディスプレイ出来たとか、もう言えません。

で、家に帰ってきた父さんなんだけど、色々勝手が変わってしまったていて相当驚いたようだ。

まあ、何せ家に帰ってみれば、いつの間にか近所に名も知らぬ大企業の本社が出来ていて、それが自分の家族の起した企業だということだから驚く。

しかも起業してからも、家自体は前と変わらず引越しも増築も改装もしていないのだ。

防犯？ 大丈夫。トイ・リアニメーターが一晩で頑張ってくれました。不法侵入者にはこの「イカ臭くてぬるぬるで白濁していて、しかも浴びると即座に対象の動きを止めるイヤーな拘束液ミサイル」が発射されることになる。

因みにコレ、分解液で即座に分解でき、臭いも浴びた人間以外には全く匂わないというステキ仕様。

デザイナー部門がアイデアを出して、開発部が頑張ってくれました。但し卑猥すぎるとかで、商品には出来ませんでした。あくまで家と本社の防衛に使われています。

さて、何か話が逸れた。そう、父さんが帰ってきたという話だ。

前述したとおり、帰ってきた父さんに、あのぼやぼやした母さんが

ポロポロ泣いてしまったのがことの始まり。

その帰ってきた場所と言うのが、偶々本社に出社していた最中で、家の近所（本社は家の裏手）でうろついていた父さんと、本社の前でばったり。

母さんのポロポロは本社の真正面で行われたのだ。

つまり、母さんと父さんの感動のシーンは、本社社員の全員の目にするところであった。

先ず言うところ、うちの企業は大手ではないものの、中小の新参の中ではかなりの大手に入る。

で、取引規模は大きくても、会社の規模は小さい。何が言いたいかというと、社員同士は割りとアットホームな雰囲気なのだ。

要するに、社員の殆どはぼやぼやな母さんと家族のように密な付き合いをしていた。

社員で見ていたやつは、その全員が貰い泣きを喰らったのだ。

で、その日は臨時休業。

俺が面接して雇っておきながら、後から後悔してしまいそうになるほど優秀で堅物な社長秘書の花袋女史ですら貰い泣きし、此方が何か言う前に本社を臨時休業にし、あまつさえ社長の旦那様帰還パーティーをいつの間にか社員一同に広め、気づいたときには本社でパーティーという流れに持ち込まれていた。

あまりの手際のよさに、一歩引いたところで見ていた俺がもう一歩引いてしまうほどの物だった。

「社長の旦那様の帰還を祝って

乾杯!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「「「

とまあ、何故か酒盛りになった父さんの帰還パーティー。

皆々様が酔いつぶれて、母さんもほんのり酔いつぶれたその後のことだ。

普段ののんびりした雰囲気からは似合わない気もするのだが、父さんは実は避けに強いらしい。

余談だが、血筋的にヨーロッパ系のクォーターらしく、その影響が父さんはザルなのだそうだ。

「つまり、鋼一はローカルな魔法を継いだ、その系統唯一の使い手だと」

「んー、唯一ってわけじゃないよ。今現在頑張って後進を育ててる最中だから」

皆が酔いつぶれたその頃合を見計らって、父さんから話しかけられた内容。それは、此方の纏う奇妙な術式を察知してのものだったのだろう。

上手く隠蔽していた心算なのだが、さすがは父さん。母さんに劣るとはいえ、その直感は何り難い。

さらっと此方が魔に手を伸ばしていることを看破した父さんは、此方を鋭い目つきで 心配そうな表情で訪ねて来た。

うん、母さんもそうなんだけど、普段ののんびりしている父さんの真

剣な、心配そうな顔と言うのはとても心臓に悪い。しかも数年ぶりに見る顔だ。やばいぐらい精神に来た。

と言うわけで、父さんには要約した話をしておいた。

異世界の魔術だ転生だというのは余りにも胡散臭い。そこで、魔導というローカルな 例えば日本土着の陰陽道や修験道のような

魔法として、魔導を習ったという事にした。

習得方法は魔導書からの独学。流石に不審な顔をされたが。

「いいかい鋼一。この世には“立派な魔法使い”を目指す  
「ストップ父さん。MMのイデオロギーは現実世界では通用しないよ」

言いかけた父さんの言葉を、静止の言葉で上塗りする。

「魔導の本懐は魔に抗う術。人の世を魔の邪悪から守り抜く守りの戦いだよ。正義とか悪とかそんなお題目は、僕らにはどうでもいいんだ」

「如何でもいって でも、立派な魔法使いは……」

「その立派な魔法使いに、何の罪も無い幾多の人間が石にされたわけなんだけれども」

言いながら、父さんにことの顛末を情報源をぼかして語る。

……さすがは父さん。立派な魔法使いというMMのお題目、心底信じているというわけではないようだ。

「そうか。ボクの知らない間に大きくなったんだね」

「4年も過ぎれば至極当然に」

「そっか。……MMの欺瞞たっぷり“立派な魔法使い”は確かに語る価値も無い。でもね鋼一。皆が目指す“立派な魔法使い”は、

決して悪いものではない。誇り高く、誰かを助けられる魔法使いを目指すことは、決して悪いことではないんだ。それだけは知っておいてほしい」

「うん。そも、魔導師の魔術は、守りの戦いにこそあるものだから魔法は生活の一部として、その果に戦争の武器と成り果てた存在。対して魔術は、思考の知識にいたろうとして、其処から魔と戦う為の武器として研ぎ澄まされたもの。」

「ふ……そうか。僕の教えられることなんて無いのかもね」

「魔法の教えなんて如何でもいい。ただ、普通に父さんがいてくれれば、それでいいよ」

父さんに求めるものは、魔法の師ではない。

父さんに求めるものは、あくまで父さんなのだから。

「そっか」

「そっだよ」

そういつて、どちらともなく破顔する。

小難しい話は如何でもいい。大切なのは、父さんが漸く家に帰ってきたという事。

「お帰り父さん」

「ああ、ただいま」

## 07 我、就学にあたわず？

と、言うわけで、諏訪家万全の状態で、いざ商業界に革命を  
！！  
というところで、不意に待ったがかかった。

「は、学校？ あ」

「そういえば、こーちゃん学校に言ってるよ最近見てないわね」  
「いやいや、それ問題だから」

そう、よくよく考えれば、俺こと諏訪鋼一は、まだ小学生。今現在の年齢が ええと、確か、9歳だっけ？

「えっと……そうそう。こーちゃんは今年九歳よ」

「息子の年くらい覚えておこうよ瑠璃さん……」

「んふふ、でもね、こーちゃんって何だか我が子ながら年下に思えなくて」

まあ、精神的には、人間なら既に磨耗寸前まで行くぐらいの年月は重ねている。

マキリィゾヴォルケン？ あんなのまだ若い若い。背徳の獣はもつと凄かったぞ。

「まあ、とりあえず、だ」

「学校行けと？」

「そう。キミはまだ子供なんだから、ちゃんと学校行って学んできなさい」

うむう、この真面目くんめ。

母さんはぼわぼわな人だけど、割と乗りはいい。

俺が既にある程度の学を持っているのを何となくで見抜いたらしく、学校に関しては一言一言言った程度で、後は寧ろ会社経営の方に積極的になっている。

おかげで肩書社長の母さんは、実質秘書兼ご意見番みたいな感じになっている。

「学校……ねえ」

「そそ、学校」

言う父さんだが、今さら学校に行くのもぞつとしない。

だって考えても見て欲しい。アレだぞ。小学生。それこそ何時だったかに行つた入学式のときは酷かった。もう阿鼻叫喚。ガキしかない、ガキが纏まらない、親はガキを御しきれない、俺は俺で七五三みたいなブカブカの服を着せられたし。特にあの服がイヤだった。

「まあ、仕方ないか」

「学校、行く気になつてくれた？」

「学校に行けばいいんだよね？」

さらつと。本当にさらつと言葉を吐いてみた。

母さんは気づいたみたいだ。「あらあら」なんて此方をみて微笑んでいる。

ばれたみたいだけれども、とめる心算は無いみたいだから安心した。

「うん、そう。学校にさえ行つてくれれば、此方としては安心何だよ」

父さんのそれは、本当に此方を心から心配しての言葉だったのだらう。

けれども、最早俺は目的を決めてしまっていた。嘗ての、今生こそ一般人として生きようと思っていた俺なら別だったかもしれない。

けれども。立派な魔法使い達の暴虐を目の当たりにしてしまった俺には、もう嘗てのように、無知の如く振舞うことは無理だろう。

目的は、表と裏の完全分離。そして地球から魔法世界の影響を撤廃すること。

「んじゃ、学校に行くことにしよう」

そういつて、早速一本の電話を書けることにした。

これから俺が行うのは一種の裏技行為。しかし、バグやチート、イカサマに比べて、コレは本当に正しい正規の手段。

「あ、Hello, Professor. Is this a good time to talk with you?」

ギタギタな英語で、早速WMM (World Military Mianiacs) で知り合った知人に連絡を取ったのだった。

Side Other

其処からの鋼一の行動は、まさに神速と違って違い無いほどの速度だった。

父銀二が気づいたときには、既に小学校に対して休学届けを出し、かと思えばいつの間にか一人でパスポートを取り、これまたいつの

間にか飛行機の手ケットを取り渡米の準備を終えていた。

「兵は拙速を尊ぶというので」

「いや、君はただの子供でしょう」

「ぼくを只の子供扱いしてくれるのは、父さんくらいです」

あつという間に身の回りの整理を整えた鋼一は、そのまま成田から米国へと渡米する。

目的は原作介入の為の手段。つまりは教員免許だ。

日本ではスキップ制度は無い。然し、アメリカを含む諸外国では、教育制度が日本のものとは所々違ってくる。

鋼一はその制度の隙間を利用し、正当な手段で教員免許を取り、正規のルートで麻帆良にもぐりこもつと考えたのだった。

ただ、麻帆良にアポを取る方法を考えていなかったのは完全な間抜けではあったが。

「とりあえず、ぼくが渡米してる間にぼくの兄妹でも作って置いてください。あ、妹希望で」

「ば、馬鹿!!」

「あらあら、こうちゃんお兄ちゃんになりたいの?」

「はい。可愛い妹とか凄く欲しい」

「あらあら、なら頑張らなきゃね、銀二さん」

「ちょ、瑠璃さん!!」

真つ赤になって慌てる銀二を満足げに眺め、鋼一はそのまま渡米する。

WMのミリオタ仲間 Kontakto を取った鋼一は、その知人の伝手を使って大学試験を受講、そのまま入学を果たす。当然入学費用

はちゃんと払う。

大学に入学したは良いが、正直4年も米国に滞在する心算は無い。3年……いや、もう正直1年で教員免許だけでもぎ取って帰国してやるのかと、鋼一はそんな事を考えていた。

Side Other Out

ふむ。やはり百年単位で大学生をやっていると、小学校のあの有象無象としたカオスよりは、此方のロウに傾いた混沌のがすごい。ミスカトニツクの隠秘学科。ああ、懐かしき混沌カオスの法ロウ。

まあ、それほど長居する心算は無いのだけれども。

とりあえず、さっさと教員免許を手に入れるために、パパッと解りやすい成果を出してしまおうと思う。

正直、ネタのストックは幾つでも有るのだ。

一般教養？ 一体何年アメリカで暮らしていたと（ry

Other Side

そういうわけで鋼一が手を出したのは、諏訪グループで次に開発しようかなと考えていた「自立多脚高機動車両」の開発だった。

この自立多脚高機動車両と言うのは、要するに自動車のタイヤの部

分が本体から自立している車両、と言うことだ。

イメージとしては、4輪バギーのタイヤ部分に腕をつけて、その地面に面する部分に幾つかタイヤをつけたイメージだ。要するにタチマ。

試しにパパツと引いた設計図。それを電子メールで本社に送り、パーツを日本で製作して輸送する。

そうしてアメリカに引っ張った金属部品を組み上げて、現地で更にプログラミングを施す。

幸いにして鋼一にはプログラミングの適性はある程度あったらしく、本職の情報系の学生に協力を仰ぎつつ、鋼一はあつというまにソレを完成させてしまったのだった。

曰く「術式の型式がプログラミング と言わないが、コッチの字袴子も情報構造だし」とのこと。

そうして完成した自立多脚高機動車両 面倒くさいのでOrtMovableManeuverCarでOMMCとした を、早速教授の研究室に持ち込んだ。

……ら、後論文を仕上げて来れば、卒業させてくれるとか言われた。

この時点で9ヶ月。鋼一本人は「割と時間かかっちゃったな」とか考えていたが、周囲にしてみれば、異例どころか脅威のペースでの研究開発なのだ。

正直、嫉妬とか羨望を通り越して、既に恐怖以外の感情は何処からも消え去っていた。

のだが、その感情を向けられる当の鋼一は、そんなことは関係ない

とばかりに早速執筆に取り組んでいた。

最初に自動車の歴史について語り、その有用性について語った。  
次に自動車の有用性に対する、自動車の持ちうる弱点　つまりは  
不整地での機動力低下を語る。

例えば災害地。例えば事故現場。

如何に素早く行動するかが重要な昨今で、しかし陸からの交通手段  
はどうしても限られがちであること。

空があればいいと思うかもしれないが、空は天候に左右されやすく、  
ソレはそれで危ない。

故に、「雨にも負けず風にも負けぬ」、強靱かつ高機動な陸上機は  
いまこそ必須。

そこで考案したのが、このOMMC。

どんな不整地でもどれだけ傾斜があろうと、崩れやすかるうがぬか  
るんでいようが、空と水の中以外ならどんなところでも自由自在に  
走り回る。

機動力では従来車両を圧倒的に上回り、機動に慣れれば二次元的な  
挙動すら可能になる。

まさに新世代の車両。OMMC。

まあ、あくまで理論だけ。

正直俺が作ったOMMCなんていうのも、鉄くずをつなぎ合わせて  
なんとか壊れることなく動いている、と言っだけのメカだ。

廃棄された自動車からのスプリングとか普通に流用しているので、  
ジャンプとかしたら多分二三回で潰れる。

シュープリスとか魔導理論を用いた機体に比べて、それ以前に現状  
のOMMCでは既存の自動車にすら劣る。

俺が提示したのはあくまで可能性。コレを如何生かすかは、ランナ  
ー次……後続の開発者次第。

「そのうち、日本の諏訪グループから発売するかもしれません。」  
「鼻屑に〜」

で、最後は結局宣伝になる。

が、この論文が大いに論争の場を荒らした。

次期機動力として考案されていたインセクト・マニユーバ。要するに、蟲の多足構造を真似した万能陸戦装備計画。ソレに対するOMMCは、如何考えてもIM計画の一步先を行った代物だった。コレに政治経済と揺れに揺れた。

とにかく優れて信頼性のある物を取りたい派閥。外国製品を国に採用したくない経済界。もうとにかく荒れに荒れ、大荒れた。

因みに、中立だったり此方を押しにくれたりしているのは、主に政治とか軍とか。

M Sと取引のある相手様たちだ。鋼一は自分の事がばれているのかと首をひねったのだが、実質はM Sが日本発の欧米魔術という事で、日系の存在はCISとかに注目されていて、利用できるならじゃんじゃん利用しようという風潮になっていた、と言うだけの話ある意味で、OMMCは利用価値を認められていたのだった。

S i d e O t h e r O u t

「コイチ、キミはうち卒業していいよ」

「教員免許と卒業資格は？」

「勿論ちゃんと用意してるぞ。ほら」

ある日突如としてWMMの同好の士であるクラウドに呼び出され、何事かと思っていたら教員免許と卒業資格を渡された。

「M I N T卒業資格と教員免許 うん、確かに」

「ぶつちやけ、これ以上此処にいられても教える物もないし、と言うか正直君がここにいると毎日が忙しすぎてしんどいよ」

「ブツチャケたなこのミリオタめ」

「キミも同類だろう？ 然し恐ろしい物だ。キミはまだ10才だろう？ そんなに生き急いで、何が目的なんだい？」

クラウドの言葉に、思わず苦笑する。

どうせその内10歳の教師なんて溢れかえりはないが、どうせ10歳の教師なんて俺以外にも沸く。まあ、無免許の上色々な法律に反した教師だろうが。

「別に生き急いでる心算はないんだよ。出来ることを出来る状態値にしておきたいだけ」

「ふん？ 良くわからんな」

「日本語って魔術的だろ。言葉が混沌カオスなんだ。コツチの言葉使つてると妙に実感するよ」

「ほほう、そうかキミはオカルティストなのか」

「理の機械系に向かつて言う台詞では無いな」

「違うないだろうが、なら先に君の発言を撤回すべきでは？」

「実感のある言葉だからね。そう簡単に取り下げると、言葉の価値が下がる」

「矢張り君の言葉は分けがわからん。コレがキミの言う魔術的って事なのかな」

クラウドの言葉に苦笑で返す。

「で、キミはこれから如何するんだい？ 色々な企業からスカウトが着てるみたいだけど」

「当然、日本に帰る」

「勿体無い。どこかに就職してしまえば、即座に重宝されるだろうに」

「ふふん、残念だが、俺は既に就職済みなのだよ」

そういつてクラウドに名紙を渡す。

そういえばの話、クラウドには大学入試にしている世話になった割りに、コッチの名紙は渡してなかったな。諏訪グループの。

「これって、最近日本で有名になってきたところ？」

「そそ。親の名前で企業した会社」

「前々から凄いとは思ってたけど。うん、コーイチ」

「うん？」

「キミ、化物だ」

言われて、思わず驚いて。

ニヤリ。

「褒め言葉として受け取っておくよ」

けれども直後、思わず口が歪む。

そして、あえて如何にもと言うような笑顔でわらって見せたのだった。

そうして準備は整った。

俺の年齢とネギの年齢は3歳差。原作開始まで予想であと3年。

正直、1年で卒業は予想外だ。  
時間も余るが、取り敢えずは帰国しよう。

「もしかしたら、もう着てるかもだし」

そろそろ見に行こうかな、なんて考えているのだ。

ついに、ついについに。

行ってみようかと思う。

麻帆良学園へ。

## 08 学園都市の朝はぬらりひよんに魅入られて。

鋼一です。

帰国してたら本当に兄妹が出来ていた件について。

母さんのおながが大きくなっていて、帰国直後くらいに出産。洒落にならないレベルでびっくりした。

で、照れる父さんに「報告しろよ」とマジ切れの一撃を叩き込んだ俺は悪く無い筈。

因みに妹でした。名前は藍。正直、麻帆良行くより家で藍の相手していたいです。

物凄く可愛いです。

まだ面識はありませんが、雪広あやか女史があそこまで傾倒するのもわかる気がします。

ああ、もうちょっと此処に居ていたい。

と、言うわけでやってまいりました麻帆良学園。

此処に来るのは少し迷ったのですが、然しどちらにしる事は此処を中心に巡るわけです。

此処を観測していれば、大まかな時間の流れを観測することも出来るだろうし、メリットとデメリットを考えた場合、俺は此処に留まったほうがいい、と感じた。

さて、この麻帆良だが、かの有名な学園結界に守られているのは周知の事実。かどうかは知らないが、俺が此処に訪れた際、先ず最

初に気になったのがこの結界だった。

なんというか、こうでかい結界を堂々と張られていると、いかにも「何か有りますよ！」と宣伝しているようにしか見えないというか。本来用事や許可の無い人間がここを訪れると、結界の作動により魔法先生やら番人やらが此方に殺到してくる仕掛けになっているのだが、今日の俺は極普通の転校生として、転校手続きに来た一般人なのだ。

因みに、俺に麻帆良への転校を勧めた魔法使い、ウィリアムさんの紹介状付きだ。

何かこの紹介状がフラグ臭くて、なんとしてもコレを断ろうと思っていたのだが。

何処からともなく俺が麻帆良へ転校しようとしていることを聞きつけたウィリアムさんが、いつの間にかこの紹介状を用意して、その上で「先方には話を通しておいた。安心してくれ（キラッ）」という感じなのだ。

正直余計なお世話を通り越して、簀巻きにして溶鉱炉に放り込みたいレベルなのだが、向うは親切心でやってくれているので文句を言うわけにも行かない。

多分、俺が日常的に漏らしている余剰魔力から、俺を何とかして裏世界に引っ張り込みたいと考えているのだろう。まあ、パツと見で見える魔力は、一般人にしては多い程度にしてある。

うーん、コレも善意なのだろうか。折角ある魔法の才能を開花させたいと。

因みに、この状況に父さんは頬を引きつらせていた。

何せ一度父さんと模擬戦もしたからなあ。父さん、基本的に補助系

の魔法を使う幻術師だったのだが、此方がニトクリスの鏡とか“我埋葬にあたうわず”乱射したりしたら簡単に勝てた。

因みにその後、M Sの見習い魔導師 階位にして3〃8くらいの見習いとこの模擬戦を見せたのだが、何か物凄く引かれてしまった。まあ、確かに此方の世界のファンシーな魔法と違い、俺達の使う魔術というのは、鋼を生み鋼を鍛え鋼を振るい、因果を生み因果を歪め因果を叩きつける、そういう、ある意味地味である意味派手な戦いなのだ。

相手をするプラクティカスも中々の物で、俺はM k . 2 3 一丁で相手をしていたのだが、俺の弾幕を増殖させたバルザイの偃月刀で防ぎ、一気に接近して斬りかかって来た。

増殖バルザイの偃月刀、その刀身には防護呪紋。かなりそれに力を入れて修練を積んだのだろう。驚いたことに、増殖バルザイの偃月刀は、一本に付き2〜3発も俺の弾丸を防いで見せた。

後、ニトクリスの鏡とか修練して、擬装を覚えれば面白いんじゃないかな、なんてアドバイスを入れておいた。

鏡で擬装され死角から襲い来るバルザイの偃月刀。 うん、面白そうだ。 戦術に組み込んでみるかな？

「あはは、魔法使いの魔法って、鋼一の使ってる魔術に比べると、もう少し見た目がファンタジーだから……」

「どちらにしろ人を傷付けうる手段なのにね。むしろあんなファンタジーな魔法だからこそ、隠匿規制が緩かったりするんじゃない？」

例えば拳銃。こんなモノを日本で持っていれば、ソレが見つかった瞬間確実に大騒ぎになる。

「内緒にして置いてください！」  
とかで誤魔化せるレベルでは、決してないだろう。

ソレに対して魔法はどうか。危険度でいえば拳銃に並ぶ　否、それ以上かもしれない。

だというのに、魔法に関して見つかった場合、記憶を消すか、内緒にすることを約束してもらうかという選択肢が与えられる。

正直、正気かと疑ってしまう。

何せ、選択肢を与えるというのは、目の前で拳銃をちらつかせながら「おう、記憶消されるか黙っとくことを約束するか選べ。もし喋ったら　ワカルダロウ？」的な事を言ってるのと大差ない。

魔法の隠匿と言うのは、魔法使いのためであると同時に、一般人のためでもある。その事を、この世界の魔法使い、特に西洋魔法使いと呼ばれる連中は、その事を忘れている。いや、理解していないのかもしれないが。

さて、話が逸れたが、そろそろ現実を目を向けようかと思う。

「えっと、源先生、お聞きしていいですか？」

「はい、どうしたの？」

「なんで女子中学エリアに学園長室があるんですか、って言うのはまあ、学園長が「禁則事項です」って事で理解できるんですが」

「フオッ!?　何か物凄く失礼なことを言われた気が擦るんじやが

!??」

「大体あってますよ」  
「源くんっ!!」

視界の端で悲鳴を上げるソレ。

うん、解ってる。多分コレがそうなんだとは思っただけれども、でも実際に目の前にすると 違和感が凄いです。

「もしかしてこの妖怪が学園長さんですか？」

「はい。こんなのも学園長です」

「こんなの!? それにわし妖怪とちがう!？」

「因みに、この妖か 学園長先生をみて、妖怪と判断しなかった人間って居ます？」

「私の知るところでは、皆さん同じ反応しかしませんね。高畑先生はご存知ですか？」

「あ、あはは、いやあ、ボクも似たような反応しか知らないなあ」

壁際に立つ老け顔の男性が、苦笑しながらそう話した。

因みに件の学園長は、なにやらしくしくと部屋の隅にうずくまっていたが。

妖怪ジジイがそんな事をしても気色悪いだけだというのだ。

「さて、と言うわけで、麻帆良へようこそ諏訪鋼一君。ワシが麻帆良学園学園長、近衛近右衛門じゃ」

「諏訪鋼一です。よろしくお願ひします」

そうして仕切りなおし。極普通の挨拶の中で、不意に此方に対する干渉を感じた。

この感じからして思考盗撮だろう。舐めるなよ人間。こちらら邪神相手に心を読まれるなんて慣れっこだ。つまり、擬装の方法だっていくつかは用意してある！！

「フオツ！！」

「どうかしました？」

「いや、なんでもないぞい」

その一つ、マルチタスクの極地、同時に複数のことを、其々全く別の速度で、全く別の方向に思考する。

通称混沌思考。カオス・タスク混沌とした思考はまさにカオス。

その全てが本物の志向で、けれどもどれ一つとして今必要な情報は記載されていない。

流石にコレでも邪神は此方の考えを読み解いてきたが、この中から本物の思考を探し出すのは、多分人間には不可能だろう。

少し戸惑ったような近右衛門だったが、さすがは老獪な妖怪と言っべきか、そんな内心の戸惑いを表に出すことなく、即座に好々爺とした老人を取り繕った。

「うむ。それで、君を呼んだのは麻帆良に来るに当たっての手続きに関して………だけではないのじゃ」  
「ですか」

そりゃまあ、転校の為だけに態々生徒を校長室に招待しているなんて事をしていれば、確実に校長としての業務は廻らなくなるだろう。

「本題はの、キミに魔法を学ぶ気があるかと言うのを聞いたかった

のじゃ」「  
「……………」

魔法、と言う単語が出た瞬間、部屋の温度が少し下がった気がした。因みに源先生だが、話の切り替えをしたところで校長が退室を促した。正直ジジイとオッサンの三人でこの部屋とか勘弁してほしい。潤いがほしい。

「どうじゃね？」

「そのお誘いは、前に別の方からも頂いたのですが、矢張りお断りさせていただきます」

「ふむ、そうかね。因みに理由を聞いても良いかね？」

「理由ですか？」

「うむ。キミぐらいの年代であれば、魔法と聞けば興味心身に知りたがるものじゃと思っておったのじゃが、何分キミの反応が予想以上にければあじやったものでのう」

ふむ、まあ確かに此処で魔法に関して全く興味がありません、という態度をとっているのも、聊か以上に不自然だったか。

「……………ぼくは、ファンタジーよりはSF嗜好なので」

そういつて、軽く左手を振ってみせる。

バチン！ と響く音に、瞬間高畑先生が身構えた。

「ふむ、ソレは？」

言って此方の左腕、正確にはその先に漂う青白い光を指差して問い掛ける学園長。

「携行型の低出力雷撃機です。護身用に」

「ショックフラスタ」  
手首の先からパチパチと音を立てて放たれる青白い稲光。諏訪グループの中の防犯グッズ開発をしている部署で作られた最新作だ。ベルトポーチに取り付けられた小型バッテリーから電源を引く必要があるが、それでも携行型の暗黒もとい、防犯グッズとしては破格の性能と携行性を持つ。

「そんなモノを……」

「魔法なんて危険物に比べれば可愛い物でしょう」

「ぬう。しかし、ソレの乱用は避けてほしいのじゃが？」

「あくまで護身用具です。身の危険がなければ使いませんよ」

左手首でバチバチ光っているコレ。見た目は派手だが、その実威力としてはスタンガンより若干強いかな、という程度の威力しかない。見た目が派手なのは威嚇。有効範囲は調整可能で、使い方はグフB3型、通称グフカスのヒートワイヤー……って言うってもわからんか。要するに、最長15メートルくらいまで伸ばせるワイヤーアンカー。コレの接触対象に対して電流を流せるという仕様だ。バチバチ放電してるのは先端のアンカー部分。

「なるほどのう。科学の申し子か。そういうことなら、麻帆良にあるロボ研なんぞに顔を出すのもいいかもしれんのう。麻帆良の技術系は色々すごいからの」

「では、その内お邪魔させてもらおうと思います」

「うむ。では宜しくの、鋼一くん」

「はい、此方こそ」

「ああ、そうそう。キミの担当教科なんじゃが、英語を頼もうと思  
つておる。いやよかった、タカミチ君が忙しくて、ちよつど変わり  
になる教師を探して居ったんじゃよ。何、本分は理工系かもしれん  
が、留学生のキミなら容易かるう?。」

.....。

「は?。」

## 09 就労の準備を手短に

鋼一です。何の因果か1-Aの副担任をする羽目になりました。

いやね、確かに教師としてもぐりこめればいいなと思って大学で資格をとってはきましたよ。

でもね此処は日本ですよ。労働基本法に確か15歳未満の子供の就労を禁ずるってのがあったはずだ。

- うん？ 原作の神楽坂アスナ、新聞配達のバイトやってなかったか？？ というか、四葉五月 超一味ってバイトどころか屋台経営してなかったか？

中学生で就労ってアリなのか？？？

いやね、そもそも麻帆良には一般的な小学生として転校しようとか企んでたわけですよ。

いくら教員免許とったからといって、流石に伝手もなくいきなり麻帆良に就職できる筈ありませんので。

で、色々資料を用意してたんですが、いつの間にか無駄になりました。

うーん、いいのかそれで。俺日本国籍で、小学校中退か？ しかも中学行ってないとか。

いや、もしかしてアッチの学校でスキップした扱いになってるのかも - -

自分の学歴が把握しきれないとか、意味不明すぎる。

若干自重しつつ、引越しの準備を進める。

やはり麻帆良に移り住むにあたり、麻帆良学園内の教師寮に住むのは必須のようだ。

事実、俺が今住んでいるのは関西圏。関東圏まで通学するのは若干辛い。

まあ、手段が無いわけではないのだが。

「と言うわけで家から出ます。俺のこと忘れないでよ、藍？」  
「だ……」

うーん、コレは返事ととってもいいのだろうか。

因みに調べた所、15歳未満の就労に関しては少しの例外があり、その条件として

- ・ 児童の健康及び福祉に有害でない。
- ・ 労働が軽易なもの。
- ・ 所轄労働基準監督署長の許可を受ける。
- ・ 修学時間外に使用すること。

などの条件を満たした場合、例外的に就労が可能となるらしい。普通こんな条件とねえよと言いたいところなのだが、何故かこの麻帆良では普通にまかり通ってしまった。

いや、教育者に未成年を使うなよという突っ込みは此処では普通にスルーされる。

だめだ此処、早くなんとかしないと。  
公僕まで魔法使いに支配されているとか、ちょっと洒落にならない有様になっている。

とりあえずM Sを経由して報告書をあげておく。これで政府が対応してくれればいいんだけどさ。

と言うわけで、麻帆良に移住するに辺り、前もってある程度の準備をやっておこうと思う。

とりあえず麻帆良に行く前に、幾つか作っておきたいものがある。一つは水素エンジンバイク。もう一つは、対魔防護服。

いくら俺が隠蔽系の魔術を扱えるからといって、麻帆良の内側にはいつて何時までもそれが持つとは思わない。

いや、一般人相手になら何時までだって隠し通す自信はある。しかし、あそこは麻帆良。“立派な魔法使い”達の巣窟だ。

いくら相手を毛嫌いし馬鹿にしている俺とて、だからといって相手を見縊る愚はおかしくない。

対魔防護服に持たせる機能は、自身の魔力の隠蔽と、外界からかかる魔的作用に対する抵抗<sup>レジスト</sup>。

無効化することも不可能ではないのだが、その場合、魔法的知識の所有を疑われてしまう。出来ればそういう事態は回避したい。

今現在の俺の立ち位置は、過去に魔法に関する事件に巻き込まれた天才科学少年、というなんともおかしな立ち位置だ。

うん？ なにかこの経歴、西博士 わが師に似てない？ あの独学だけどき。

脳裏によぎった嫌な妄想を振り払い、早速製造に取り掛かることにした。

先ず初めに製造に取り掛かったのは水素エンジンバイク。  
これからの時代のエコロジーを考えた一品だ。

何故水素エンジンがエコロジーかと言うと、燃料に化石燃料を必要とせず、水さえあれば長時間行動が可能となるから、というものだ。

水はご存知の通り、 $H_2O$ 、水素1酸素2となっている。

本当に簡単な化学式で言うと、此処から



と言う化学式により水素と酸素が取り出せるのは至極当然の事。

まあ実際には純水は電気を通さず、電気を通す為に若干触媒を混入する必要があったりするのだがそこは割愛。

取り出した水素と酸素は何を隠そう可燃性。つまり良く萌える。いや、燃える。

というか爆発する。

この電気分解により発生する気体を、いい具合に混合してエンジンに注入。イグニッションにより発火し、化石燃料の代替物の役目を果たす、と言うわけだ。

本当に簡単な説明だが、大体こんな感じ。水素の可逆反応から電力を取り出す方式とは大分違う。

単純に水と電気で動く自動車両だ。

まあ、この電気分解するための電力を何処から持ってくるのか、とか、電気分解して燃料として使用された水素と酸素、火を使うわけだから当然 $CO_2$ とか水蒸気が出てくるわけで、それで本当に温暖

化対策になつていのかと問われて首をかしげるところだとか、実は問題は色々ある。

が、まあ俺がほしいのは商品ではなく俺が乗るために必要な代物が一台あればいいのだ。

コストとか完全無視でなら、たぶん今のウチの技術力とノウハウがあれば完成する。

鬼械神作れて水素燃料自動車作れないとか、ギャグだし。

と言うわけで、適当に設計図を引いて開発部に送りつけておく。

スーパーウエスト無敵ロボ28号のバージョン忘れたのだが、なんだったかにデモンベインの機械的側面を突いて、電撃で攻めるというシステムを持った奴が居た。それに搭載されていた錬金術の成果たるバッテリー。アレならば、長時間バイクを稼働させることも夢ではないだろう。

因みに、スーパーウエスト無敵ロボ28号の電撃姫、アン、ダメ、痺れちゃう：除夜に響く鈴の音Ver.E（名前思い出した。下品）は、デモンベイン相手に善戦したものの、長距離からバルザイの偃月刀を投げ付けられ怯んだ隙に、アトランティスストライクでミスカトニツク河に叩き落され、その影響で機関部に問題発生、浸水してそこから電力が漏電して河ごとシビシビ（その影響で河に進入してきていたCCD（邪神奉仕種族）が全滅したのは笑えた）。で、痺れているところをレムリア・インパクト。博士は脱出した物の、河の真ん中で痺れていたスーパーウエスト無敵ロボ28号の電撃姫、アン、ダメ、痺れちゃう：除夜に響く鈴の音Ver.Eと痺れていたCCD一群はそのままレムリア・インパクトの重力結界に飲み込まれて消滅した。

うん、荒れは本当に凄かった。

さて、話が逸れたが、そういうわけで水エンジンバイクの製作はス

ターゲットしたのだった。

免許？ 個人の所有する敷地内なら、免許は絶対必要と云うわけではないのですよ。うん。

で、次。対魔力装備。

此方はもう、機械的に如何にかするしかない。本当なら護符とかの製造法で魔術的防御を施したいところだが。ぶっちゃけ、ある程度の強靱性をもった衣類に防護呪紋を刻めばそれで十分対魔力装備としては機能するのだ。

が、今回はその手法を取ることはできない。

何故なら俺が今から行くのは、俺が魔導師であるという事を知らぬ敵陣。

的を騙くらかすには、呪紋防護ではダメだ。魔術的な防御では、どうしても穴が出来てしまう。

そこで、だ。今回用いるのは、科学的対魔力防御。

ふふふ、コレに用いられる技術もやはりDr・ウエストの技術的流用だ。

あの変態 じゃない、天才師匠は、錬金術こそ手を出したが、結局の所根本にあるのは超科学と超頭脳。

考えても見てほしい。あの時代にあの巨大ロボだ。デウスマキナって60m級の超巨大ロボなんだぜ？

デモンベインを上回る巨体のドラム缶 じゃなくて、えっとスー

パワーエラスト無敵ロボ。あの時代、プログラミング系の技術なんて高が知れているような時代。俺の知る限り、プログラミング分野で最先端を行っていたのは覇道財閥かドクターくらいだ。

それでも最先端は覇道。そんな時代、博士がいかにしてあのドラム缶を　もう面倒くさいから以下ドラム缶で　を操作したかと言　うと、もう本当に意味不明なことにあのギターのセッションでやっていた様子だ。

お前は何処の熱気バサラだと小一時間問い詰めたくなつたが、ドクターのソレは多分熱気バサラのソレを上回っているかもしれない。なにせアレだけ妄言を吐きながら、平然とあの破壊ロボを操っているのだ。

思い出してほしい。破壊ロボって腕4本あるんだぜ……？

普通の（とは言っても意外とマッチョな）科学者が、あんなことを平然とする。場合によっては鬼械神にとて勝利しうる超科学。

俺が弟子入りしたくなるのも当然だった。

さて、そんなわけで開発したのが、この機械式背囊、超西式超科学万能機械腕Ver.Ko。

ドクターのドラム缶を一回り小さくしてバックパックにしたような形をしているコレ。しかしその実、これはあのドラム缶の前身の一つだ。

ハーネスでガツチリと身体に固定するコレ。その内側に詰め込まれた機能は、4本の機械腕をはじめ、時空間歪曲計測器やら各種計器をはじめ電子端末機能、衛星通信端末、小型核融合炉、そして何を思ったか超電磁バリアまで備えているというステキ仕様である。

若き日のドクターは、コレ一つで数多のCCDと渡り合ってきたのだそう。マジ惚れそう。

で、そんなドクターの過去の作品の復刻レストア版。

対魔力防御の目的には合うが、今一機能が足りない気もする。

首をかしげて、ふと思い出したことがある。

そういえば、ドクターの着てた全身タイツみたいなあれ。あれも確か抗魔力作用のある一級の科学礼装だったような。

えっとなんだったか。何時だったかドクターが自慢してたんだよ。

あのタイツみたいな服も、錬金術で産み出したヒイロカネを極細に繊維化して、それを自分の体型に合わせてびったりと編み上げた一級品だとか。

そうそう、あの時なにか散々自慢されて、その翌日だったかに同素材の抗魔力の施された白衣を渡されたのだ。だからマツチヨ科学者のツンデレは誰得にもならないと（ry

まあ、流石にあの白衣は手元には無い。

その事にちよっぴり感傷を感じて、首を振って頭を切り替える。

そもそもあの白衣とて、ループの初期も初期、デモンベインよりアイオンが活躍していたような時期の話、まだ魔導師としての錬度が低く、カリンの執筆にも入れず、魔術にかわる代替手段として科学に目を付けたような、本当に最初の頃の話。

まあ、頭を切り替えよう。

とりあえず、ヒイロカネの錬金は今の俺には十二分に余裕で出来る。

然し、呪紋か。魔術的な知識に関して断った俺が、なのに魔術的知識を持っているという事を知られるのは避けたい。まして俺の呪紋はこの世界の物とは様式が大きく異なっている。

いや、それゆえに逆に勘付かれにくくなるか？

うーん、父さん家の倉庫の中で拾った魔法書に書かれていたふるい防護呪紋という事にしておこうか。

そうと決まればパパッと実行。早速家に帰ってヒヒイロカネを練成して、ソレを繊維化して被服部門に服を作って いや、自分で作るう。こういう代物は手作りのほうが霊的価値上がる筈だし。

なんて事を頭の中で考えて、早速実行すべく、地下の魔導実験室へと足を運ぶのだった。





「そうですね、麻帆良最強の頭脳と名高い超さんと、機械系グループにこの人ありといわれる葉加瀬さんですね。ロボ研とか是非見学してみたいです」

とか無難に答えておいた。

超と葉加瀬の瞳がキラリと光った気がするのは気のせいだと思っておきたい。

「因みに先生、ガンムと言えば？」

「ザ、でしょう。まあ、F?型も好きですが、FZ型とか正直あまりません。頭違いもイイデスネ」

「バケツ頭力。渋いところつくネ ソレじゃ、一番好きなシリーズはなんネ？」

「08小隊ですかね。ビームもいいですけど、空葉莢が飛び散るあの絵は堪らないと思います」

「ふむ、実弾派か。ではやはりレールガンとか？」

「当然大好きです。というか、個人で携行できるレベルのレールガンは開発を終えました。本体の総重量が10キロぐらいで、初速が1020m/sで、50cm厚のコンクリの粉碎に成功しました。

電力供給の上限に余裕を持たせてあるので、外部電力を使えばもう少し威力が上がりますね。その場合は1810m/sで、25cmの鉄板を余裕で貫通。多分戦車の複合装甲にも多少通用するのではないか、と言う感じですね。まあ、流石に実証は出来てません」

「ロマンあるネ。先生、うちと提携しない力？」

「此方も責任ある立場なので、簡単には首を振れません。後で超さんのところを見学させてください」

「望むところヨ」

とまあ、そんなマニアックな会話を超さんとぺちゃくちゃ。気づけば周囲は呆然。頭の上でお花とか蝶々が舞っていた。

いや、龍宮さん、そんなに目をキラキラさせて　もしかして  
レールガン欲しいんだろうか。

「因みに、レールガンは売らないの力？」

「流石に銃刀法に抵触しますしね。技術的ノウハウの蓄積のために  
作った、という事にしてます」

「本音は？」

「無論、うちの技術者達のロマンです」

「その分では、人型機動ロボとか既に作ってそうネ」

「解ります？」

「本当に作ってるの力!？」

実は作っていたりする。

俺のシュープリスを見た一般技術チームが、自分達もロボを作りた  
いと言いだしたのだ。

で、俺は当然(?)許可を出した。

結果として出来上がったのは、ロボと言うのもおこがましい外見だ  
けのハリボテ。

なにせシュープリスには魔導理論を搭載しているのだ。シュープリ  
スを参考に作っても、出来上がるのは巨大な鉄のプラモデル、とい  
ったところか。

当然の失敗に歯噛みした開発チームは、其処からマジギレした。

「ダメなら最初から開発してやる!!!」

と、驚いた事に連中、MTの開発に成功したのだ。

世間一般では2速歩行ロボがもてはやされているらしいが、今現在  
諏訪グループのロボ研では既に二足歩行のロボは既に開発が終わっ  
ている。

逆脚で野山を駆けるMTとか、普通に実装されているのだ。

で、現在の連中の課題はノーマルの開発。その内NEXTも開発しただすのかと思うと、空恐ろしい物がある。

まあ、流石にコジマとかは無理だろう。そのあたりはこの世界の魔法に手を出さざるを得ないかもしれない。

うん、そうだ。なんだったか。魔法にある念話　つまり無線意思伝達を機械に組み込んでAMSの代替手段として

「諏訪ボウズ、大丈夫か？」

「おっと失礼しました。ついつい次の開発構想が思い浮かんでしまった物で」

「ああ、ワカルよソレ。ワタシも偶にあるからネ」

などとぺちやくちや。

宇宙開発のために必要なのは一体何か。マスドライバの建設は本当に必要なのか、軌道エレベーターの建造で地上のエネルギー事情はどう変化するのか。軌道エレベーターの建造に必要な資財を何処から調達するのか。出資は如何するのか。軌道エレベーターを建造する為にはマスドライバが必須か。であれば軌道エレベーター建設後のマスドライバの有用性はどうなるのか。マスドライバを軍事利用される恐れは、その対策は。軌道エレベーターを建造後、軌道環の建設は可能か。可能である場合の建造法は。などなど。

「ふむ、有意義な会話が出来たネ」

「ええ、面白い意見を得ることが出来ました」

さすが未来の火星人。此方が夢を模索するような意見である事に対して、彼女の意見は出来ることと出来ない事がつきりと判別できており、更に其処にいたるためには、と言う前提で幾つかのパターンを想定している。

思考のスタート地点とゴール地点が、彼女と俺とでは大分違う様子だ。

さすがは未来火星入。着想点が我々とは違う。

因みに、大気圏内外への輸送手段の構想を話し合っているくらいの時点で、クラスメイトの大半が目を回してしまったのは……うむ。今度初心者入門向けSF座談会でも開こうかな。

10 天才と何とかは紙一重といつかむしる完全に向こう側（後書き）

サブタイはデモベのBGMのタイトルを元ネタにして、少し弄っているのですが……。このサブタイに関しては弄りようが……。

## 11 屋上の放課後は魔性に魅入られて

「答える。貴様は一体何者だ」

とある日の放課後。ロボっ子に呼び出されて女史中学校舎の屋上に訪れた俺は、金髪合法ロリ　じゃない、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルに、そんな問いをぶつけられていた。

「新任の副担教師の諏訪鋼一です。　前にも言ったと思うんですけど」

「巫山戯るな。貴様、魔法関係者だろう」

「魔法の知識はありますね。魔法は使えませんが」

さらりと答えてみる。途端少し詰ったような合法　マクダウエル。

「ふん、それは嘘だな。巧妙に隠している様だが、私には解るぞ。貴様の内から匂う闇の気配が」

そういつて手の平に魔力を溜めるマクダウエル。なんだろうか。見ていて哀れになるほど貧弱な魔力なのだが、それでも魔法の矢一本分くらいは十分に賄える魔力だ。

何の心算だろうかとぼっと見ていると、不意にマクダウエルがその手を此方に向けた。

「『闇の精霊1柱、魔法の射手・闇の1矢』」

「ちよ、うおわっ!？」

咄嗟に回避するが、その魔法の矢はバツサリと俺の副の裾を削り取って。

「わお、父さんの魔法の矢とはえらい違いだ」  
「ふん、貴様の父親が何者かは知らんがな。600年の研鑽の成果だ。魔法の矢一矢しか使えん今の私とて、そこらの十把一絡程度に後れを取る事は無いぞ」

そういつて、再び手の平に魔力を集めていくマクダウエル。  
うーん、なるほどなるほど。要するにこの合法ロリ、魔力が足りないからと魔力を圧縮して瞬間的な出力を高めているわけか。  
要するにコンデンサの増幅装置みたいなものだ。  
その為、魔法の矢一矢を行使するには十分な魔力を得て、その上彼女は600年を生きる吸血鬼だ。術式の構成からして、内の父親（魔法使いとしては三流）とは、まるで別物扱いだ。

「因みに、攻撃してきたという事は、反撃しても言いという事ですかね？」

「ふん、反撃できる物なら、な」

そういつて再び魔力を高めるマクダウエル。  
ちくせう、意味が解らん。コレはもしかしてあれか。学園長のジジイの陰謀かっ！！

とりあえずピンチと感じて素早く右手を左腕に伸ばす。

スーツの袖に隠され、腕に貼り付けるようにして取り付けられたソレ。貼り付けられたキーボードを、右手で素早くカチカチとキーボードをタイプする。

拙い拙い、今装備している武器なんて、左手のヒートワイヤーしかないのだ。

早く機械式背囊を　　っ！！

咄嗟に飛び退いたその一瞬。寸前まで立っていた空間に、一瞬だけ白い繭のような物が現れ、次の瞬間再び虚空に消えた。

「ほう、今を避けるか」

「因みにマクダウエルさん、今の何？」

「答えると思うか？」

「ですよー」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

この世界では、600年前から存在を確認されている真祖の吸血鬼だ。

太陽を克服し、古くから知識を蓄え続ける脅威の象徴。いわばナマハゲ。

そして俺の昔の記憶を検索する。

此方に転生して以来、最初の記憶はほぼ喪失してしまっていた俺だが、その問題はカリンと合流した時点で解決されている。

カリン　　というか、あの世界の魔導書と言うものは、その多くが魔術的に多重幾何学構造的に情報を含んでいる。つまり、たったの一文に数百近い読み解き方がある。

簡単に言くと、一文に情報が圧縮されているのだが。

俺は、繰り返す無限螺旋の中、自分の記憶が無為に削られていくことを恐怖した。恐怖し、次へ持ち込むために、外部ストレージに記憶を保存する、という方法を考えた。

それが、カリン　　ネクロノミコン再編再訳版だ。

コレには俺の記憶のほぼ全てが記録されている。始まりの記憶は勿論、コイツが作られるまでの全ての記憶、カリンが生まれてからの全ても記述されている。

その中から、項目・ネギま！を検索。

情報項目、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの情報を選択。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの代表的戦術パターンを検索。ヒット。

闇と氷の魔法を使う「悪の魔法使い」。不死身に近い再生能力と真祖の莫大な魔力、そして600年の研鑽こそが真の脅威。

代表的戦闘手段 「マキア・エベレア闇の魔法」「人形練り」「操糸術（ただし人形練りスキルの一部）」「大東流合気術」など多数に渡る。

学園結界と登校地獄に封じられている現状、魔力は1割も無い。

若干の魔法行使は可能。触媒による補助により、魔力の上がる夜間帯は更に魔法の行使が可能。

注意：めっちゃ強い。結界と封印が解けると本編最強。結界がなくても最強。公式チート。ただし味方になると慢心スキルにより若干補正がかかる。

最後の注意書きは何だっ！！ じゃなくて。

「 つー！！ 」

直感に従って左腕からヒートワイヤーを1メートルほど伸ばして振り回す。

途端、何かワイヤーに当たり、ブスブスと音を立てて霧散した。

「ほう これも躲すか。然し、なんだそれは。何かのアーティファクトか？」

「こ、答えるとでも？」

「ふ、よかるう。ならばイヤでも喋らざるを得なくしてやる！

！」

ちよ、マジこええ！！

気が付いたらすぐ傍まで近寄ってきているマクダウエル。なんだったか、歩法、縮地法のダウングレード　瞬動だったか、それか。判断した瞬間に腕を取られ、投げ飛ばされると判断した瞬間に相手の腕を組み取って肘打ちをつきこむ。

「ぬ」

「くっ！！」

が、これほどの至近距離から打った裡門頂肘だというのに回避されるとか！！

そのまま腕を捻られそうなのを感じて、即座に大きく飛び上がる。マクダウエルの手を軸に回転。そのままマクダウエルの延髄に向かって蹴りを

「あがつ！」

「ふむ。応用はまあまあだが、そもそも応用しなければならんような状況に陥る時点でマイナス。功夫が足りておらん」

「き、厳しい事で……」

口元が引きつる。チクシヨウ、俺は開発者であり魔術師であって、格闘戦はオマケなんだぞコラ！！

どこぞの「赤いあくま」が護身術も必修科目とか言うから、色々手広く浅く格闘を学んだのだ。あくまでもオマケなのだ。クンフー足りずで当然だ。

……なんて、負け惜しみになるもんなあ。だから言わん。

「ククツ、どうした。この程度か？　だとすれば残念だが……」

「　　そおい！！！」

「ここで　　って、おいしい！！??？」

思い切って空に踏み出す。

魔術も魔法も当然使わず、校舎の端、策を乗り越えて一気に。屋上から飛び出した身体は、この世界にも当然ある物理法則、重力にしたがって真下へと加速していく。

「しかあし、タイミングを見計らってきてこそヒーロー。俺はヒーローではないが、だとすれば此処でタイミングよく来た彼奴こそがヒーロー。でもあれ？　機械式背囊って人か？　寧ろロボか？　あいや人格すらない背囊はヒーローにあらず。寧ろヒーローの強化パーツ。いわばバターののような名前の女助手が「　　、新しい顔よ」と差し出す予備パーツ。然し新しい顔とかある意味シニール。つまり彼奴は整形し放題。人の第一印象とは顔で決まる物であるが故、顔が毎回変化する彼奴は一体如何やって周囲に自らを同一人物だと印象付けているのか。生む深遠なテーマで　　って地面近ああああああ！！！！！！！」

そうしていつの間にか近付いていた地面。

変なテンションで喋り続けているからいつの間にか地面が近くなるけれども、コレはやらねば成らぬのだ。なさねば成らぬ。いわば一種のお呪い。自らを書き換える自己暗示。

「Camon Lets Play!!」

空の彼方に輝く一つの星。シャキーンとまぶしく輝くソレは、噴煙を吐出しながら空を翔け、やがて落下する俺の背後に並び立つ。

「!装着!」

飛来したのはねずみ色のドラム缶。

シャキーンと動体に撒きつくハーネス。

ドラム缶からニョキりと生え出る4本のアーム。

プシュシュと噴出すスラストーは、墜落する身体を180度回頭。

ドンツ、と音を立てて地面に着地。シヨックアブソーバーにより着

地の衝撃は大きく相殺される。

…! それでも脚にジーンと来たが。

「スーパーウェネカセラルバックバック超西式機械式背囊、装着!! さあ、よくもやってくれたな金髪  
ロリータ大きなお友達達の味方合法ロリめ。反撃の時間だ!」

## 12 奇人砲吼 交錯する機刃と魔刃。

と言っわけで反撃の時間です。

「おらおらおらおら！！！！ 突撃ハイカー！！！」

ガツンガツンガツンと機械腕のドリルが校舎に穴を穿ち、その穴を利用して器用に身体をズンズン上らせる。

視線の先には、此方を見下ろしてなにやら呆れたような顔をする金髪ロリの姿が。

校舎を上っている最中に攻撃される事は無さそうだと、内心で安堵しつつ、即座に機械式背囊と左腕のマルチブラウザの接続状況を確認。

各部に異常が無い事を確認しつつ、そのまま屋上の大地を再び踏みしめた。

「……………分けの判らん人間だな、貴様」

「いや、いきなり一般人を攻撃するマクダウエルも意味不明です。例えるならば東京の下町でF1するぐらい意味不明です」

「その非一般人からの攻撃を往なし、尚且つ逃走した後で舞い戻ってくる人間を一般人とは呼ばん！！」

「えっ、嘘」

逃走も交戦も状況次第。

機械式背囊が此方に到着した時点で、戦況は此方に有利。少し距離を開いた程度では戦場からの離脱とも言えず、故に自らの戦いやすいフィールドを選ぶのは、スポーツも競争も戦争も同じだ。



クダウエルの障壁を削り始める。

本来は砲弾とかビームとかレールガンとか、色々乱射する必殺技なのだが、残念ながらこの世界には銃刀法が存在している。いや、平然と無視してモデルガンだと言い張っているやつもいるらしいが。嘗ての世界だって銃刀法は存在してたのだが（平然と無視されていたが）。と言うわけで、今回のジェノサイド・クロスファイヤは熱線のみだ。

然し　うむ、科学的熱線は魔法障壁で防げるのか。障壁、普通に光を通して行くせに熱線だけ通さないとか、物理法則舐めてるな。

まあ、俺も出来るけどさ。敵意だけから身を守るのとか。

「ちっ、舐めるな！！」

「ええい、大人しく薄らコンガリレアに成るが良い！！」

瞬動で此方に急接近してくるマクダウエル。

けれどもその動きは一度見ている。あえて瞬動の出の予測地点から距離をとり、一呼吸置いてドリルで殴りかかる。

「ぬっ！？」

「そこっ！！！！」

一瞬の間に魔法障壁を張り巡らせるマクダウエル。

かかった！

「我輩のドリルは天を突くドリル！！　貴様如きの軟弱な魔法障壁で防げるほど、やわなドリルでは無いのでああある！！！！！！！！」

その瞬間、何かに取り付かれたかのように体が動いた。





と、高畑氏の顔を見た途端、マクダウエルは苦虫を噛み潰したかのような表情で、然し戦闘態勢は解かずにその場に仁王立ちした。ふんっ、気に喰わん。

ドリルは臨戦態勢のまま、然し何処かでこの戦いは此処までだと直感で判断した。

何か憑いていたものが落ちたかのように、急速に思考が開けてゆく。

「やっぱり……いたんなら、最初から止めてくださいよ」

「いや、悪いね。此処に来たのは今さっきなんだ」

「そんな都合のいい展開は、ヒーローの特権だ。アンタ如何見ても主人公の親友キャラとかそのあたりでしょうが。此処は僕に任せ先に行くんだ！ とかな台詞が似合いそうですもんね！」

グサッ

「プッ」

「うぐっ」

あれ？ 何か高畑先生ダメージ受けてるみたいだ。マクダウエルも笑ってるっぽいし。

「どうせアレですよね妖怪の仕業ですよ。マクダウエルさん、一つお聞きしても？」

「ぬ？」

「学園長にそそのかされましたか？」

「む ああ」

「エヴァアッ！！」

さらっと答えてしまったマクダウエルに、高畑先生が思わずといった様子で声を上げた。

うーん、やっぱりこの人、おほかせんし腹芸が出来ないタイプなんだろうなあ。

「タカミチ、貴様馬鹿だろう。いや、そういえばお前馬鹿だったな。このガキは貴様の反応で確信を持ったみたいだぞ？」

「あつ」

「まあ、ソレが美徳なんでしょうね。嘘がつけなくて虚実に惑わされやすい。なるほど、あの姦計タイプのご老人のいい駒になるわけだ」

思わず口に出してしまう。

ああもう、何か苛立っている所為で無駄に挑発してしまう。

「ぼ、ボクは駒じゃ」

「うむ、まあ然し世の中の大半はこういう自分で考えられない馬鹿だからな。大目に見てやれ」

「ちょ、エヴァっ!!」

「十把一絡が力を持つのは厄介なんですよ。力相応に頭も廻ってくれないと」

「じ、十把……」

「然し、それは此処では無理だろう。此処の認識阻害の結界は人を若干阿呆にする。特にタカミチのような警戒の緩いヤツや、雑魚なんかは簡単にひっかかる」

「ああ、なるほど。警戒の緩い雑魚なんですな。いや、力はあるから一概に雑魚とも言えない　ふむ　Intノミソの足りてない戦士か。解り易つ」

「orz」

あ、高畑先生がダウンした。

「ふむ　マクダウエルさん、まだやる気ありますか？」

「ふん、興がそがれた」

「そうですか。では、場所を変えて少しお話しませんか？ 覗き見してる人間もいるみたいですし」

そういつて、天壤のほうを睨みつけてやる。

途端、慌てたように途切れる第三者の視線。

「ほう、ジジイの盗撮を察知できるのか」

「母譲りで勘はいいほうなので」

そう。これに関しては魔法とか関係なく使える。

嘗ての世界の魔法は、魔術の行使にも直感とかがわりと重要視された。その影響もあって俺は割りと第六感が研ぎ澄まされているのだが、今生になつてからその直感は更に強化された。

多分だが、母さんの影響が多分にあるのだろうとおもつ。

「ふむ、まあ御呼ばれしてやろうか。場所は此方が指定するぞ」

「ええ、ソレは当然」

「では付いて来い。コーヒーの美味しい店を紹介してやるよ、セ・ン・セ・イ」

ニヤリと愉しそうに笑みを浮かべるマクダウエル。

そうして俺達は、二人揃って学校の屋上を後にしたのだった。

「orz」した高畑先生を放置して。

12 奇人砲吼

交錯する機刃と魔刃。

(後書き)

何か憑依した。

13 麻帆良学園 嗚呼、麗しき魔法の街よ

「率直に聞こう。貴様は何者だ？」

学校の校舎を出て、少し歩いた郊外の森近く。

そこにひっそりと立つログハウスこそが、この童姿の闇の魔王の現在の住居だそうだ。

「だから、新任の教師だと言ってるでしょ？」

「うむ？ 先程は『新任の副担教師』と行ってなかったか？」

「同じでしょうが」

言つとマクダウエルは「ククク」と小さく笑つて見せて、然しその鋭い目つきを尖らせて此方を睨みつけてきた。

「これ以上のお為ごかしは止せよ？ 此処ならば外に情報は洩れん。私からの譲歩は此処までだと思え」

「闇の福音が譲歩ですか」

「魔法を使わず、私とあそこまで渡り合った事に対する敬意だよ」

言つマクダウエル。

ふむ。

マクダウエルに対して、この場で出た話に対する秘匿をするならば、と言つ条件を持ち出して見たところ、「無論」とだけ言葉が返ってきた。

まあ、いいか。

「マクダウエルさん。一つ質問をいいですか？」

「何だ？」

「マクダウエルさん。貴女は、100を活かす為に10を斬り捨てるか、10を活かすが為100を殺すか。あなたならどちらを選びます？」

「いきなり物騒な話だな？」

突然何を言い出すのか。

そんな感情が、愉快そうなマクダウエルの表情には浮かんでいた。

「私なら、か　ふむ、私が選ぶのだとすれば、私の利となりうる1を選ぶのだろうな。それ以外など知った事か」

「ええ、なんともらしい答えだ」

「闇の福音らしい、と言うことか？」

「人間らしい、と言う意味です」

「はっ！！　この私に向かって人間らしい！？　この真祖の吸血鬼、闇の福音にむかって!？」

これは驚いた、ここにいるのは氣をやった若年性痴呆症の患者か  
なんて大げさに驚いてみせるエヴァンジェリン。

「いや、無意味に世界平和を謳うよりは、大切な物を選ぶ、と言う答えはエゴ塗れで、なんとも人間らしいなと」

「然し、それならば、正義という言葉に焦がれを感じるのもまた」

「ソレもまた、「人間らしい」なのでしょうね　まあ、ソレは如何でもいいことなんですよ」

俺が何者なのか。ソレを語るために、少しだけ話を戻す。

「俺はね、教師でもあり、企業の経営陣の一人でもあり、とある組

織のトップでもあり、革命家でもあり、何より、魔を断つ一刃だと思っています」

此処に来て得た教師という名前。諏訪グループの創立者としての存在。M S（銀色の月光団）のアデプタスとしての自分。魔法世界の影響を現実世界から排斥しようと言う革命家としての自ら。そして何より、絶対と言う名の理不尽を、憎悪で砕く刃の欠片。

「ふむ、矢張り貴様は物騒だな。で、その革命家で魔を断つ一刃が、この麻帆良にいったい何をしに来た？ 私の抹殺か？」

「ご冗談を。被害者を甦るなんてのは悪趣味な魔法使いであって、我々はそういう事はしませんよ」

「ふん、色々突っ込みどころはあるんだが、突っ込んでいては話が進まん。結局の所、貴様は何なんだ？ 魔法使いでない、と言うなら、その闇の気配は一体なんだ！？」

「魔導師、といます」

さらっと答えてみた。

「魔導師？ 魔法使いではないのか？」

「ええ、違います。魔法使いが“魔を担う者”であるなら、魔導師は“魔を帯び魔に抗う者”です」

そう前置きしてから、マクダウエルに対して少しだけ話す事にした。魔法世界の影響からの脱却、魔法という無法に対する魔導という力ウンターの存在。

そして、つい最近わかったことなのだが、この世界にも魔導は存在していたという事。嘗て、の話だが。

「元々、魔導というのは魔法ソレそのものより古い存在で、魔導は

“魔”に対して抗う為、それだけを目的として産み出された術です」「如何いうことだ？」

「簡単に言うと、退魔の魔法、と考えれば簡単でしょうか。人の世を守るため、なんて大層なお題目は掲げませんが、日々の生活を守るため、誰かが理不尽に泣かずにすむように、あらゆる“魔”と戦う為の存在。それが魔導師です」

「まるで、“正義の味方”だな」

「我々は、単純にいやな事にいやだといって抗いたいだけですよ」

正義なんて如何でもいい、と言うと、マクダウエルは何処か少し虚ろに笑った。

「ふむ　で、為らば貴様は何をしにこの麻帆良へ？」

「簡単に言うと、革命のために」

ピクリと眉間にしわを寄せるマクダウエル。

「　　言うておくが、この街の人間に危害を加えるようなら」

「いえ、ソレは有りませんので安心を。我々の目的は、現実世界を幻想世界の支配から脱却させる事。この麻帆良は幻想世界の現実世界に対する、いわば橋頭堡。まず何をするにしても、ここを抑えなければ事は成りませんので」

「一般人に危害は出んのだろうな？」

「それは無論。というか、一般人に被害を出してしまうと、我々の理念に矛盾が出ますので」

しかし、其処に拘るのはさすが“女子供は殺さない”という事で有名なエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。闇の福音の名は伊達ではないか。それとも、麻帆良で丸くなったのか。

「あちら側の支配を断ち切る　か。面白い事を考える」  
「そうですね？　至極当然の考えだと思いますが」

魔法世界の人間は、やたらとこちら側を卑下する。その癖、こちら側に対する影響力は確保したいらしく、世界各地に自らの陣営の拠点を作り、こちら側に古来から存在する魔法組織を自らの傘下に加えたがる。

それはこちら側の世界の勢力にしてみればいい迷惑でしかない。事実、関西呪術協会のように、あちら側の戦争には全く関係ないというのに、MMの意向とやらの所為で無理矢理向こう側の戦争に参加させられた現実世界側組織は多々ある。

「実際、多かったですよ？　向こう側の勢力を厭う現実世界勢力」

黄金　夜明け団とか、混　魔術とか。魔術結社ではないが、魔法の存在を知る秘密結社にフリ　メイソンとか。

「　ふん、MMの老害が、有る意味で実を結んだという事か」  
「そうですね。向こう側からの過剰な干渉。そして現実世界に対する悪影響の拡大。その結果として、魔導師と言う存在が復活した　とまあ、少し間は飛んでいるんですが、大まかな流れはそんなところですよ」

チグハグかつ拙い説明に、思わず申し訳なくなる。  
演説用の原稿とかなら簡単なのだが、こういう冷静な場所で静かに解説をする、とか言うのは案外難しいのだ。

「要するに、貴様等　魔導師だったか？　は、魔法使い達に戦争を仕掛ける、と。その前段階として、この麻帆良で諜報活動をしている、と？」

「諜報活動　まあ、そんな感じですよ。予言によると、時代が動くのはこの麻帆良だと言われているので」  
「予言？」

ピクリと動くマクダウエルの眉毛。うーん、もしかして彼女、結構わかりやすい？

「ええ。英雄の子による改革の伝説。麻帆良の土地から始まるとされる、長い英雄譚の予言です」

「それは　英雄の子というのは」

「ええ、ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドだと我々は考えています」

其処からまた少しだけ話し出す。

マクダウエルはネギ・スプリングフィールドという名前が出たとき、少しだけ悲しそうな表情を浮かべていた。うむ、乙女の涙は見ないふりをするのが紳士というものだ。

「　然し、魔法世界からの脱却な。どうする心算だ？」

「ゲートを潰します」

「……まさか、少し前にあった現実世界側ゲートポート襲撃事件は……」

「さて」

明言はしない。が、その態度でマクダウエルは大筋を理解したようだ。

「　しかし、それは……」

「幻想世界の崩壊、ですか？」

「ぬ、貴様……」

矢張り気づいていたか。

マクダウエルは卓越した魔法技術の持ち主だ。その技術は、当然現実世界だけではなく、魔法世界でも運用されたものなのだろう。

そして何よりも、ジオラマ魔法球。魔法に卓越し、尚且つアレの所有者であるならば。

そんな彼女であれば、幻想世界の違和感に関しては何処かで気づいているはずだ。

「知ってるのか？」

「大凡の想像は」

「なら、ゲートポートの破壊が何を引き起こすか、それも理解しているのか？」

「ずれた時限に存在する幻想世界を、地球に結びつける楔、ですね」  
要するに、ゲートポートというのは、門としての役割を持った錨だ。ゲートポートを全て破壊するとどうなるのか。明確には解らないが、多分、魔法世界は途端に消滅するか、はたまた完全な異次元に墜ちるか。

少なくとも、全てを破壊してしまえば、地球と行き来は完全に阻止できる。

「しかしそれは」

「向こうは此方を他所と判断してるんです。なのに、向うの争いに此方を巻き込もうとし、あまつさえその保険にこんな都市を作ったりする。いい面の皮ですが、当然それを厭う人間は出て当たり前でしょう」

「しかし、全ての人間がそうと言うわけではないだろう？」

「それこそ、知った事ではありません。火星と地球、どちらを守り

たいかと問われれば、俺が守りたいのはこの地球なので」

正直、幻想世界というのはこの地球にとってあまり利にならない。

「そもそも、魔の隠匿は、一般人を魔の害から守るために定められたものです」

「ふむ、古来魔法に巻き込まれた人間で、その後まともな人生を遅れた人間と言うのは……皆無とは言わんが、少ないのだろう」

実際、私などと言う前例も要るし　なんて、小さくボソツと呟いたマクダウエル。

いや、聞こえてますよ？　言いませんけど。

「ところが。現状ではそのもとの理由はただの建前となり、その実は魔法と言う技能を持つ人間を貴族のように扱い、それを持たない人間を卑賤の身と蔑み、あまつさえそれが隠匿された現実世界で、それが隠匿されているという事を言い事に、魔法で好き勝手する」

「魔法犯罪か」

「然り。正義の魔法使い？　何を笑わせる。そもそも争いの火種である魔法を持ち込んだのは貴様等だろう。正義の行い？　紛争地帯に悪戯に介入し、主義も理想も無く力技で意志を押しさえつける。確かに戦争は憎むべきですけど、其処に意味はあるのか？」

持論ではあるが、争いと言うのは生命に許された権利だと思う。自らの種の存続のために戦うのは、全ての生命に許された特権だ。

そして人間は、種の為だけではなく、自らの思想のために戦う事が出来る、地上で唯一の存在だ。

それを、「戦争は悪だ、悪い事だ」という客観的な意見だけで強制的に鎮圧する。

それは本当に意味があるのか。

「一言で言うと、魔法は邪魔なんです。この科学の社会では。存在するなどは言いませんが、もう少し分を弁えろ、と」

「ふむ」

それを駆逐する為に、現代に蘇った魔導。

なんとも過激な意見ではある、というのは自覚している。

けれども、その意見を曲げたいというのなら、代替案なり何かを用意してから出なければ我々は耳を貸さない。

「まあ、いいのではないか？」

「えらくあっさりしてますね」

「ふん、魔法使いどもが滅ぼうが駆逐されようが、私の知った事ではない。それこそ弱肉強食、因果応報と言つものなんだろうさ」

言つとゆつたりとソファに腰掛けるマクダウエル。

ふむ、為らば一つ、交渉を持ちかけてみようか。

「マクダウエルさん。一つ交渉しませんか？」

「私と交渉だと？ まあ、聞くだけ聞かんでもないが 安くは無  
いぞ？」

「貴女にかけられた呪いの解除を対価に、私の計画妨害を止める、  
と言つものです」

がたんっ！

視線を上げれば、ソファから勢い良く立ち上がったマクダウエルが  
此方を睨みつけていて。

「貴様、私の呪いを解けるのかっ!？」

「まあ、容易く」

「解け！！ 今すぐに！！」

「契約は……」

「そんな物幾らでも結んでやる！！」

いいながらガクガクと此方の首を前後左右に振り回すマクダウエル。慌てて宥めて、なんとかマクダウエルを落ち着かせる。どれだけ解呪したいんだか。

「とりあえず、学園側に察知されるのは避けたいんで、何処か魔術的に断絶した空間を用意しなけりやなんのですが……」

「魔術的断絶 　ふむ、要するに魔力的な接続が遮断されている空間という事か。ならばアレが使えるな」

そういつてマクダウエルに腕をつかまれ、強制的に部屋を移動する。隠れるように儲けられた地下室への階段。それを引きずられるように降りると、その地下の部屋の一室に、台座の上に載せられた薄らと輝く玉が載せられていた。

「これは……ジオラマ魔法球？」

「ダイオラマ魔法球だ」

「意味としては同じでしょうが」

なんだか同じような会話を、逆の立場でついさっきやったような。

然し、コレがかの有名なダイオラマ魔法球、通称『別荘』か。

確かに一時間を一日と言うのは、有る意味他より早く成長できるという利点はある。　　が、それは他より早く“老ける”と言うことだ。女性　　普通の人間には、あまり連続して使用すべき代物ではないだろう。

「さて、どうだ？」

「確かに、此処ならばばれないですね」

「ふむ　　では、貴様の言う魔術とやら、じっくりと見せて貰うとしよう」

然り、と頷いて、手を空に掲げる。

「　　カリン」

『Yes, Master.』

空間を割って現れたのは、我が魔導書ネクロノミコン再編本のカリン。

割れたガラスの様に穴を開けた空間は、すぐさま時計を巻き戻すようにしてその姿を元に戻す。

そうして現れたカリンは、即座にページの束となり、俺の身を包み込む。

『マギウス・スタイル  
魔導戦闘形態』

《肯定。魔導戦闘形態実行》

「ヴァアの無敵の印において、力を与えよ。力を与えよ。力を与え

よ

《バルザイの偃月刀 鍛造》

魔力により生まれた炎。その中から生み出された、魔導師の杖たる魔刃。

マクダウエルはコレだけでも良く驚いてくれたようだ。ふむ、少し気分がいい。ついでに派手に魅せようか。

「霊燃機関、全力稼動 超攻勢術式防御結界」

『顕現せよ、霊験あらたかなる刃よ』

そうして、己の身を囲うようにして増殖する幾多の偃月刀。

「術式添付」

『対呪詛破壊術式』

言霊と共に放たれる呪術的情報により、無数のバルザイの偃月刀に青い光が宿る。

字袴子として伝播したした呪詛感染によって刻まれた刻印。それは、文字通り呪詛を断つ為だけに編み出した術式だ。

「 往け」

そうして放たれた刃は、マクダウエルを囲うようにして地面に突き立ち

ガギインッ！！

派手な音を立てて、マクダウエルのその身を雁字搦めにしていた、

呪の鎖その事如くを須らく断ち切ったのだった。

「おめでとう、マクダウエル。コレで君は自由の身だ」

「ああ、そうだな。コレで漸く私は、自由になっ たんだな」

そうして、呆然とした表情で呟くマクダウエル。

その表情は、何処か切なそうで、俺はその瞳から零れた小さな雫を見なかった事にしたのだった。

13 麻帆良学園 嗚呼、麗しき魔法の街よ（後書き）

そういえば龍宮さんって30巻くらいで魔法世界の事を幻想世界つて連呼してるんだよね。ネギが謎解きする前から殆ど気づいてたんじゃないかなー……と。

## 14 闇の少女に優雅な安らぎを

さて、そんなわけで麻帆良にてマクダウエルの封印を解除したわけなのですが。

「とりあえず、封印が解けたって言うのは内緒で」

「ふん、まあいいだろう」

「はい　では、契約内容の方に入りたいと思います」

と言うわけで、用意しておいた羊皮紙にラテン語でサラサラと文字を書き連ねる。

まあ、結構読み辛いのだが、簡単に言うと以下のとおりとなる。

### 契約書

私、諏訪鋼一はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルにかけられた二種類の呪い（1・登校地獄　2・学園結界）を解除する事の対価として、以下の条件を求めらる。

- 1・現1　Aが卒業するまでの学園への在籍。
- 2・諏訪鋼一の企てる計画内容の秘匿
- 3・諏訪鋼一の企てる計画に対する妨害行為の禁止
- 4・お友達になってください

「おいちよつと待て最後のコレは何だ！」

渡してみたら、そんな反応が返ってきた。

「駄目？」

「阿呆か貴様、私は吸血鬼だぞ！？　何が悲しくてこんな阿呆みたいな契約内容で友達を作らねば為らんのだ！！」

「駄目？ 友達なつてくれない？」

「友達なんぞいらん！」

「マクダウエルがいらなくても俺は欲しい！！！」

「貴様なら友達なんぞ幾らでもいるだろう！！！」

って、

おい、どうした？」

……ふ、ふふ、ふふふふ。

友達、一杯……ねえ。

友達つてさ、貴重だよねえ。うん。

俺つてさ、ほら、無限螺旋に捕らわれてたじゃない？ あれの中に居るとき、なんていうのかな、幾ら何度友情を育もうと、周が変わるたびにその友好度とか好感度は全部リセットされちゃうわけじゃない？

それがさ、何か一時期猛烈に空しくなつて、周回が万を越えたあたりから友人を作らなくなつたんだよ。そしたらさ、なんだかそのまま孤高の魔導師路線を突っ走っちゃって、そのままロンリーマギウスに成っちゃつてさ、結局其の後友達を作るように成つたのは、無限螺旋末期の事。俺に対する大十字の評価なんて「一人で悟り開いた氣に成つてるシヨタ魔導師」だぞ？ なんじゃそりゃと思わずTrue行つた大十字の頭を殴つた俺は悪くないはず。

そして今生。

前世の影響で、最初っから飛ばしまくつた結果。俺の現在の友人というと、ネットサークルの面々と会社の面々。いや、後半は部下だから、なんて野暮な突っ込み話。あれは共に機械で浪漫を夢見る同士だ。

「友達 居ないんですよ」

「……それは……」

「友達、駄目ですか？」

「ぬ、く……」  
「トモダチ……」

30分くらい粘った結果、友達契約を結ぶ事に成功したのだった。

「さて、それじゃエヴァ」

「なっ！？　なんだその腑抜けた呼び方はっ！！」

「んむ？　友達と言うのは、ニツクネームで呼び合ってもいいものでは？」

「だからといってその様な」

「駄目？」

じーつと見上げるように頼み込んでみる。マクダウエル　エヴァは基本善人なので、正面から誠意を籠めて頼み込めば、早々断られる事はない、と思う。

「　ち、契約を盾に取るか、恩を傘に着るかすれば蹴り飛ばしてやれた物を……」

「うん？　何か言った？」

「なんでもないわ戯け！！」

軽く頭を叩かれたが、なにやらよく解らない内にエヴァも納得してくれたらしい。

「、それじゃ、エヴァ。コレを」  
「何だこれは？」

そういつて手に置かれたそれを見て首をかしげるエヴァ。

其の手に置いたそれ 魔刃鍛造の術式ででっち上げた、簡単なマジックアイテムで、鈴の形をしているのだが、エヴァが其の鈴を振っても、一向に音はならない。

「其の鈴には、エヴァに掛かっていたものと同じ、麻帆良大結界とのリンクが埋め込まれてます」

「つまり、コレを身につけておけば、結界への侵入者を感知でき、また結界に拘束された状態に有ると擬装できる と？」

「はい。魔力に関しては、擬装である為、その鈴自体に吸収されるようになっています。と言うのも、緊急時には、其の鈴から逆に魔力を引っ張る事が出来るようになってるんです。一種の蓄電池ですね」

「ほう、中々面白いマジックアイテムだな」

他に応用が出来そうな術式だとかなんとか呟くエヴァンジェリン。まあ、事実そういう術式の応用だし。

因みに其の鈴だが、形としてはブレスレットと言う体裁にしてある。

「ふむ」

「おお、良くお似合いです」

「ふん、世辞はいい」

言いつつ、満更でも無さそうなマクダウエル。

ふっふっふ、貴女が日本の古文化フェチだという事は既に調べがついているのですよ！ 如何だその鈴！ デザイン的には古きよき物と言うのを狙ってるからな！ 開運の効果もあるよ！！

「あ、それとなんですけど」

「なんだ？」

「学園結界の術式をそれに移植する際、間違って登校地獄の術式も移植しちゃったんですよね」

「　　って、なにい!？」

「あ、大丈夫ですよ。バグはちゃんと修正して、3年には卒業できるようになってます。勿論、修学旅行にもいけますよ」

「貴様、何て事を……!!」

これでも一応先生なのでね。サボり魔がサボりそうだと解っていて、何の手も打たないというわけにはいくまい。

「くつ　外れん!？」

「ああ、登校地獄の呪詛ですね。まあ、三年後には外れますよ。こうプチッと」

「今すぐ外せ!」

「そりゃ出来ません。それも契約内容から外れた事にはなりませんよ?」

「貴様、計ったな!!」

「キミはいい吸血鬼だったが、キミの保護責任者(学園長)がいけないのだよ　　って、何をやらせるんですか」

「私を知るか!!」

「振ったのは貴女でしょうが!!」

「振つとらんわ馬鹿者!!」

まあ、そんな感じで適当に話をはぐらかしたり誤魔化したりしつつ。結局、鈴はそのままエヴァの左腕にくっついたままで行く事となったのだった。

#### 14 闇の少女に優雅な安らぎを（後書き）

ストック  
発掘品が一つあったので投稿。  
キティ  
猫には鈴をつけましょう、という話。

さて、そんなわけでマクダウエル もとい、エヴァと友達になりました。

いやあ、エヴァとの会話は楽しい。工学的なのとか近代兵器に関する話は出来ないが、魔法知識、ひいては『闇』に関する知識の造詣が深く、故に此方の『外道の知識』、その入門編に当るネクロノミコン新訳を与えたところ、三日ほどでその基礎的なところを完全に理解してしまっただけだった。

まあ、理解できる事と行使・運用できる事はまた別なのだが。

「然し、貴様等の魔術というのは反則だな」

「そうかな？ 単純な出力と効果範囲でいえば、魔法のほうが反則だとおもっけど」

で、仲良くなった俺達は、土曜日の半休なんか麻帆良の端の喫茶店などで魔術・魔法に関する考察を話し合ったりしている。

「確かに物理的威力で鑑みれば魔法は派手だし威力もある。 が、

これはお前達魔導師に通用するのか？」

「くくく」

そう、当然通じない。

西洋魔法使い、と名乗る彼等の技。魔力を対価に精霊を行使するというそれは、精霊と言う存在を行使しているものではあるが、あくまで“現象”を直接ぶつけているだけに過ぎない。

対する我々魔導師の扱った魔術。これは概念的な力と、物理的な力を操る。

それは水を燃やし、炎を凍らせ、無限を有限に、窮極を凡庸に、不可逆を可逆に、限定的に世界を欺き書き換える業だ。

それは寧ろ神秘。

あくまでも世界の法則である“精霊魔法”では、世界の法則を捻じ曲げる魔導師の魔術に敵う事為らず。

「まあ、それはあくまでも達人クラスの話だな。低い階位の魔導師なんかだと、確りと術式で防御しないと拙いだろうな」

「それでも、達人級には我々の魔法が通じんという事だ。く、これが老害共に知れば、あちらは荒れる事に成るぞ」

「何を言ってるんだか。エヴァなら糸に魔力をのせられるだろうに、術式に干渉しながら糸でバツサリ、なんて手段をとられると、ウチの半数はとられるだろうね」

「ふん。奥の手を使えばその半数の犠牲も抑えられるのだろうが」  
くくく、とどちらからとも無く笑い声が洩れる。

そう、対処法は幾らでもある。そして、その対処法の対処法も想像が付く。

こんな話はいたちごっこ。対処に対処で返せば、何処までも続いてしまうのだから。

因みに、エヴァを攻略する最も簡単な方法は、デウスマキナで出撃すれば良い、と言うだけの話だ。

超上空からの高機動を以って高火力を叩き込む。それだけで大抵の相手は終わるのだから。

などと、中々物騒な話で花を咲かせるのが、1-Aの副担任に納まつてからの、土曜半休の大抵の過し方だ。

因みに、エヴァの従者である茶々丸嬢は、現在買い物に行っている

らしい。自前で人件費の要らないメイドさんとか実に羨ましい。俺も作ろうかな、と一瞬思ったが、やめておく。……何せ、俺が作った場合、間違いなく西博士の系統になる。

……流石に、自分の作品に罵倒され続ける人生ってのは嫌だしなあ。第一、アレは人造人間だし。

と、そんな感じにエヴァとコーヒーを啜りながら、魔法と魔術に関する考察を色々と話し合っていたそんな最中。

不意に何者かが近づく気配を感じて、エヴァから視線を逸らした。

「うん？ ああ、ヤツか」

麻帆良学園の端に位置するこの喫茶店は、然しエヴァが目をつけるというだけ合って、隠れた名店と言うやつだ。

そこそこ人は来ているものの、そもそも此処に訪れる客と言うのは基本的に麻帆良大の所属生くらいだ。なにせ、小々中等部からこの喫茶店は、幾分遠過ぎる。土曜日の半休に、態々此処に来るためだけに時間を使うぐらいならば、普通は娯楽施設最寄の飲食店を使うだろう。

だというのに、視線の先には麻帆良中学の制服を着た少女が一人。頭にお団子を載せた、ぴんとした立ち振る舞いの少女。その少女に気付いた周囲が、瞬間ざわめいたような気がした。

「ヤア、こんな所で会つと八奇遇ネ、エヴァンジェリン」

なんか出た。

というわけで、エヴァと魔導座談をしていたらなぜか“麻帆良の最強頭脳”が割り込んできた。  
な、何を言ってるのか（ry

さて、まあ彼女の目的は大体わかる。彼女の知る史実がどの程度の物かは知らないが、少なくとも俺と言う存在に関する記述は無かった物だと考えられる。

それゆえに、UNKNOWNである俺に対する情報収集、といったところだろうか。

「おや、出席番号19番の超さんですか」

「そうヨ、こんなところで会うとは奇遇ネ諏訪ボウズ。しかもエヴァンジェリンと一緒にカ、如何いう繋がりかな？」

そういつて首をかしげる超。まあ、この表情だけでは、彼女の背景を感じ取る事はできないだろう。見事な擬態に内心感心しつつ、用意していた手札を切ることにした。

「いえ、エヴァンジェリンさんは結構なアンティーク収集家と聞いたので。母が園芸の延長でアンティークを集めていまして、ならエヴァンジェリンさんに何かいいものは無いかな、と」

「園芸用、と言うわけではないが、飾り物ならばカンテラなんぞが良いだろっな、と話していたところだ」

そうして、こんな突発的な切り出しに咄嗟にあわせてくれるエヴァはもう本当にすばらしいと思う。

「なるほど、園芸ナ。然し、それだけでエヴァンジェリンが他人を近づけるとは」

「ふん、私にも気紛れぐらいはある」

「真逆、ホシた力？」

「縊り殺すぞ阿呆」

ニヤリと笑う超鈴音に、口元を引きつらせて言い返すエヴァ。こうして見ると、この二人と言うのも中々に仲がいいのかもしれない。

「ところでセンス、センスは関係者なの力？」

と、一人コクコク頷いてコーヒーを啜っていたら、唐突に超が何か言い放った。

何とか口の中身を吹き出すことは無かったが、ほんの一瞬気を乱してしまったのは己の未熟だろう。

といつても、実体として動揺した様子は見せていないから、気付いたのはエヴァくらいだと 信じたい。

「関係者、というと アレの、ですか？」

「そうそう、アレの、ネ」

そういつて窓の外を指し示す。何故誰も疑問に思わないのかは知らないが、窓の外では、誰かが物凄い速度で屋根の上を駆け抜けていく様子が見えていた。

「あー、事情を把握しているという意味では関係者です。といつても、アレは使えませんが」

あくまでも技術者です、と行って誤魔化す。

此処での俺の肩書きは、あくまで帰国子女の年少教師なのだ。一応技術者としての顔は出しているが、それでも、例えばM Sの代表としての顔や、諏訪社の偉い人としての顔なんかは出す必要は無いのだ。

「フム。センスには才能有りそうだからネ、連中もセンスを引き込みたかった、という所かネ」

「か。その線で、俺を引き込む為にエヴァンジェリンさんを嚇けた様子でしたから」

「それは また」

超が呆れたように顔面を引きつらせる。

何せそれは、政治家が思い通りにならない相手に対して軍隊を差し向けるような物だ。とても文明人のやる事とは思えない。いや、文明人だからこそ、かもしれないが。

「よく生き残れたね」

「対魔法兵装は一応開発してましたから」

何しろ、魔法はそうでもないが、魔という力自体はかなり応用が効く。

あの西式背囊についているドリルも、刻印された式により、回転するという行為を儀式と見立て、それにより周囲からマナを引き寄せ、ソレによりドリルに呪術的攻撃力を付与しているのだ。

その威力は ご覧の通り。

「ふむ ウチと技術提携しない力？」

「是非に と言いたいところなのですが、俺個人の判断ではどう

にも」

「フム。新興でありながら一気に勢力を拡大している、件の諏訪社の御曹司であるセンセでも駄目力」

「俺の実験はそれほどでも有りませんよ」

などなど。

まあ、一般的な機械技術の分野であれば、彼女等に援助を出すのもいいかもしれない。

超鈴音が未来へ帰るとして、彼女の友人の出席番号24番、葉加瀬聡美を後々うちの会社に引き込めれば、ウチにとって損は無い。

まあ、重役会議に意見提出という形をとって、彼女達への出資は決定されたような物だ。

まあ、流石に魔導機械の類の技術は渡せないが。アレを渡してしまうと、色々崩壊する。

「ま、今日は色々収穫があったヨ」

「何を得たのかは解らないが、まあそれはよかった」

「うん。それじゃセンセ、エヴァンジェリン。また月曜日に学校で」

そういつて席を立つ超。いつの間にか頼んだエスプレッソは、これまたいつの間にか飲み干され、机の上にはいつの間にか自分の分の飲み代が置かれていた。

このくらいなら別に払ってもいいのに。

「　　コーイチ。私はヤツと契約を結んでいてな。その関係で、一部貴様に敵対、ないし中立に立つ場合がある。その事を言うておく」  
「うん。まあ、彼女の目的は此方の目的の正反対だからね」

色々矛盾もあるし、成功確率は低そうだし　　なんて呟くと、エヴ

アは一瞬目を見開いて、呆れたような表情で、けれどもニヤリとワラって魅せた。

「全く。貴様は一体何なのだ？」

「だから、ただの1 - Aの副担任だよ」

なんてのは、格好つけすぎかな？

15 三当幾何学 時逆昇りの革命家（後書き）

各人の内心

「諏訪 鋼一」

公式チートキャラクター。情報系を強化しないとなー。超のは純科学寄りの情報攻撃だし、魔導科学は拙いんだろうなあ。

「E・A・K・M」

中立、なのだが。約束は守るが、また面倒な。全くコレだから人の世の柵と言つのは……。

「超 鈴音」

少なくともエヴァンジェリンと呼ぶことを許されている程度には親密と。

## 16 それでは乱痴気騒ぎを始めよう

というわけで日曜日です。

教師としての仕事は早々に終わらせて、昼からは諏訪社のほうに来ています。

「見てくださいよ社長！ ついに我々の汗と涙と血の結晶が結ばれました！！」

と、その途端に抱きついてきた技術者一同。だから俺は社長ではないと。

とりあえず面々を宥めつつ、示された地下格納庫へと向けて足を進めると、ソレは其処にでんと鎮座していた。

「これは」

「開発コードGAEA。二足で動く、真正銘純機械式のロボです！！」

如何だ凄いだろう！！ と自慢げに胸を張る技術者面々。

いや、うん。コレは凄い。資料を見せてもらったところ、どうやらこの機体、俺が提示しておいたコア構想を考えて作られているらしく、各パーツがブロックごとに交換可能となっており、整備性なんかも結構ある。

性能のほうだが、流石に魔導ハイブリットであるシュープリスには及ばないが、それでも既存のMBT相手には余裕で勝てる程度の戦力だ。

何せ、機動力で圧倒し、その上戦車では不可能な航空戦力に対する対応力まで持っているのだ。

もしコレが表に出れば、世界の戦場の様相は一変すること間違いないだろう。

まあ、コレの扱いは自由にさせるさ。何せ俺はコレの開発にはノータッチなのだから。

「因みに、シミュレーターは？」

「既に稼働可能です！」

思わず親指を立ててサムズアップを向け合っただった。

「なるほど、マニュアルとオートマの切り替えか」

「ええ。戦闘機動と通常機動を用意し、戦闘機動はパターンを登録する事で、より直感的な操作を可能に、通常機動はその挙動の一つ一つを明確に指示することで、戦闘以外の場面で様々な様相に対応できるのですよー!!」

「OS自体は　ははあ、モーションキャプチャーを使ったな？」

「是!!　まさにその通りなのですよ!!」

などなど。

諏訪社の地下工場で、GAEA開発チームの面々に色々話を聞いていた。

シミュレーターの結果はまずまず。熟練のパイロットが扱えば、ま

ず既存の兵器には負けないだろう。  
地味にアンチマジックジェネレーターを搭載している所為で、機体周辺ではマナ系の術行使が不可能となり、更に攻撃魔法の軽減、魔法防御に対する破魔効果など、試作実験機にしては中々にあげつない性能をもっていた。

うーん、なぜか対魔法使い兵器としての完成度がガシガシと上がってきている。

確かに、各国からは違法魔法使いに対する対策として、退魔系武器の注文が増えてきてはいるが。

「ん？」

と、そんなことを考えていると、不意に脳裏に嫌な予感が走った。何事かと周囲を警戒しながら四方を見回す。特に何かがあるというわけでは無さそうなのだが。

「きつ、緊急事態っ！！」

突如放たれた悲鳴のような言葉。何事かと慌てて近場のモニターに駆け寄ると、其処に映し出されていたのは諏訪社の海外支店。この世界では田舎町でしかないアーカムに置かれた、アーカム支店の映像。

ただその様は常の物とは違い、無数の黒い影に四方を囲まれるというところでもない有様となっていた。

「なっ！？」

「アーカム支部からの連絡です。四方を悪魔に囲まれ、撤退不可能！」

ちっ、MMに嗅ぎ付けられたか。

諏訪アーカム支部は、アメリカにおける呪術的闘争の重要拠点の一つだ。

諏訪　　というか、M Sという組織は、基本的に前衛を行う組織であるが、同時に各組織のつなぎをとる仲介組織でもある。

武力という一点で最も優位な西洋魔法。威力で劣る他流派の魔法では、それに対抗できない場合がある。

そうだった場合に備え、M Sを介して諏訪の科学装備を売りつけているのだ。

直接戦闘能力の低いネイティブアメリカンには呪術的ドリルランス、組織的呪術を行使するロシア系にはAMFシールドやら。そのほかにも通常規格の銃で扱える対魔弾とか、色々。

で、アメリカにおける物資生産の重要拠点であるアーカム支部。あそこを叩かれてしまうと、そういった呪術系の装備以外に、通常生産品などの組み立ても止まってしまふ為、我社としても結構痛い。

「　仕方ないか。俺が行ってくる」

「然し、此処からでは……」

「虚数展開カタパルトを使う。アレには距離なんて関係ないからな」

「そんな、危険です!!」

「大丈夫だよ。俺にはカリンが居る」

言うと同時に、何処からとも無くパラパラという音と共に現れる紙吹雪。それは俺の横で小さなまとまりになると、いつの間にか黒衣を纏う少女の姿に変わっていた。

「いけるよな、カリン」

「Yes, Master」

頷くカリンを確認して、即座に移動を開始。

GAEAの格納庫のすぐ隣の格納庫。そこに鎮座する黒鉄の機体。タラップを伝って即座にコックピットへ身を躍らせる。同時に何かでそこで鼓動したような気がした。

「マギウススタイル  
魔導戦闘形態」

《肯定。魔導戦闘形態実行》

カリンを横抱きに飛び乗ったコックピット。その中でカリンは俺に混ざり、同時にまた二人へと別たれる。

赤いラインの入った黒衣。それが、俺のマギウススタイル。

分解された断章ページが広いコックピットに散らばり、それら一つ一つが俺とシュープリスを繋ぐ呪術的回路へと変貌していく。

「接続状態確認」

《接続状態良好と判断》

よしよし。銀鍵守護機関を初めとした各システムは、全て正常に稼動。

字袴子レベルも正常値を指している。コレならば問題も無かろう。

『はあー。シュープリス、虚数展開カタパルトへの移動を開始します』

と、そうしてチェックを終えたところで、丁度見計らったかのようにそんな通信が入った。

「岩井さんか。見送ってくれるのかな？」

『とても無駄でしょうし。それと、一つお願いが』

「うん？」

『烏丸をGAEAで出します。補助をお願いします』

「はあ!？」

GAEAって完成したばかりの実戦証明もまだな機体のはずだ。一応シミュレーター上では問題なく動いている物の、だからといって実際にソレをいきなり戦場で運用するのは流石に拙いだろう。

『いえ、コレは烏丸の希望なんです。どうせ何時かやるなら、今は絶好の好機だ、と』

「確かにそうかも知れないけど……。カリン、GAEAに通信を」

《是 接続》

と、真正面に浮かび上がるモニター。其処に移るのは、黒目黒髪の何処にでも居そうな大学生くらいの青年が一人。

……。って、ああ、烏丸って彼か。ちよつと前にMSで紹介された日系の魔導師。とても優秀で、近いうちに小達人に至るのではないか、といわれていた青年だ。

確か、既に魔導書の閲覧を認められる階位に属していた筈だが。

「烏丸さん、アンタ本当にいいのか？」

モニターに向かって問い掛けると、青年は小さく頷いて見せた。

うーん、本人が良いといっているなら、此方からは特に問題は無いのだが……。

「なら、いいさ。どうせ何時かはやらなきゃならんのだし」

『はい。 と、シユープリス、虚数展開カタパルト接続。 射出体制』

気付けば肉壁の中。幾つ物瞳が此方を見つめるその部屋の中に。  
あまりアレを眺め続けていても、此方のS A N値が削られるだけな  
ので、ちゃっちゃと跳ぼうと思う。

「では、シユープリス、鋼一、出る」

途端に身を襲う浮遊感を感じながら、光の流れに身を任せるのだっ  
た。

16 それでは乱痴気騒ぎを始めよう(後書き)

烏丸 カラス レイヴ……いや、なんでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6858s/>

---

InnocentSword

2011年11月21日18時32分発行